シンタックス博士のピクチャレスク旅行
Ⅰ．第一曲から第十一曲まで[1]

著者　ウィリアム・クーム
訳　江　﨑　義　彦

目次[2]

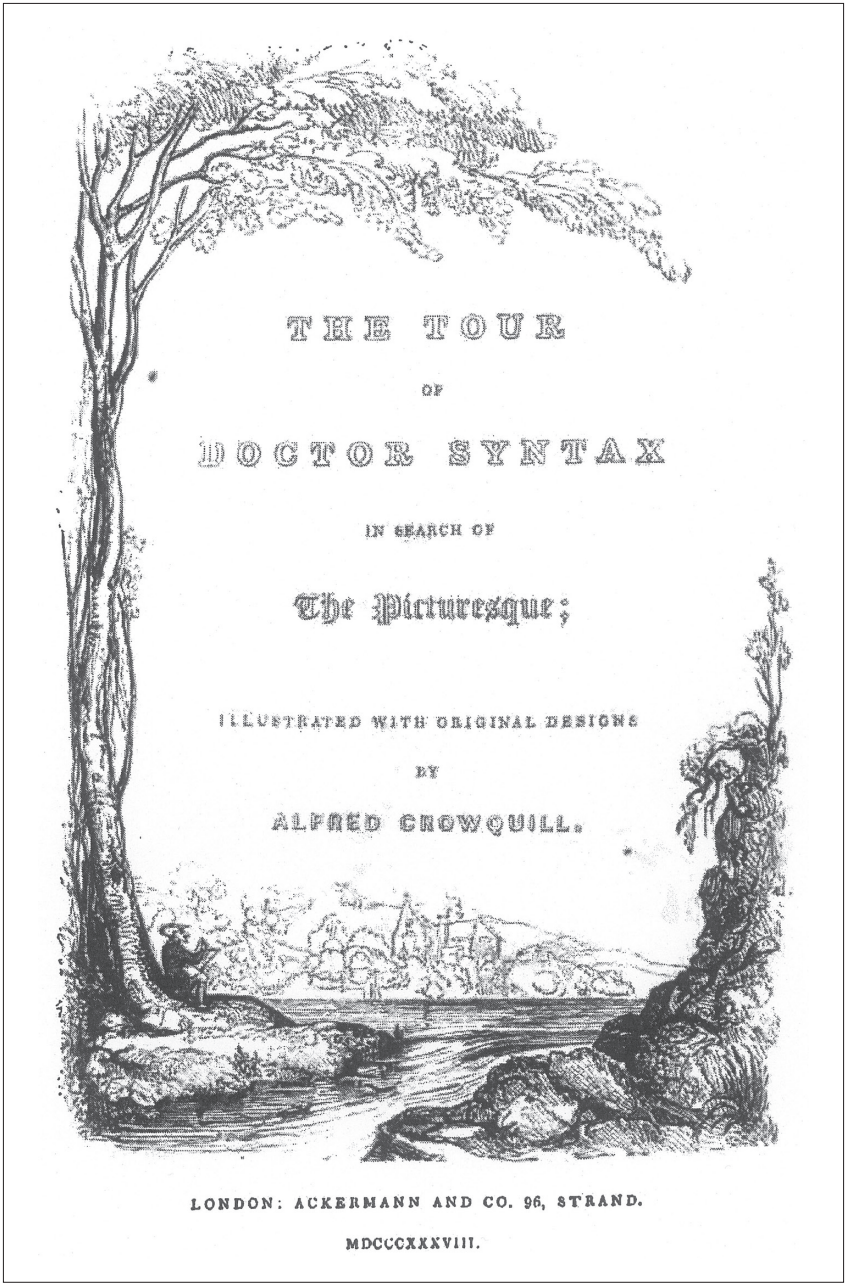
	（ページ）	（本論集ページ）
序文	(4)	148
第一曲	(10)	154
第二曲	(17)	161
第三曲	(24)	168
第四曲	(33)	177
第五曲	(40)	184
第六曲	(49)	193
第七曲	(60)	204
第八曲	(74)	218
第九曲	(87)	231
第十曲	(98)	242
第十一曲	(109)	253

---

[1] (1) 原詩は、全編が “Iambic Tetrametre”［弱強 4 詩脚］というリズムで貫かれ、2 行ずつ、きちんとした “Couplet”［対句］をなす、という英詩では珍しい詩の形をとっている。冒頭の 4 行のみ取り上げて、確認をしておきたい。

Thē schóol wās dóne, thē būs'nēss ó'er, (a)
Whēn, tĭr'd ŏf Gréek ānd Látĭn lóre, (a)
Goōd Sýntāx soúght h̆is éasy cháir, (b)
Ānd sát ĭn cálm cōmpósūre thére. (b)

DOCTOR SYNTAX.


THE TOUR
OF
DOCTOR SYNTAX
IN SEARCH OF
The Picturesque;
ILLUSTRATED WITH ORIGINAL DESIGNS
BY
ALFRED CROWQUILL.
LONDON: ACKERMANN AND CO. 96, STRAND.
MDCCCXXXVIII.

序文

シンタックス博士（Dr. Syntax）と読者であられる皆さんの間には、かくも長く幸福な親愛の情が存続してきたこともありまして、この尊敬すべき博士が前口上も予告もせずに、旧知の間柄であるということを頼みに、気が向けば随意にこの場所へ踏み込んでくる資格も大いにあると主張しましても、十分に公正な言い種（ぐさ）であるでしょう。しかしながら、博士は老齢になっても、今尚元気な活力を持っておられ、遊び心も少しも衰えてもいませんし、更には、ファッション界にも知遇を得られ、現代的な作法をも身につけられました。新しい装飾品を身に付け、また新たな友人たちのあいだに出入りされるお姿を目にするにつけ、新しい説明を少々付け加えておいたほうがいいだろうと思う次第です。

シンタックス博士のそもそもの素性については、読書界において、十分に素養のある皆さん方には、十分に熟知されている事柄なのですが、近頃頭角を現されてきたもっと多くの人々が、疑いもなく熱い思いで、博士との交誼を望まれてもいますが故に、博士の文学世界における生誕に纏わる幾つかの事情を、ここで再確認しておくことも場違いではないように思われます。

故アッカーマン氏[3]は『詩の雑誌』（*The Poetical Magazine*）という題目の月

このような詩型を用いた理由は、「風刺詩」としての面目を果たすために、作者が、特に18世紀に流行した“Heroic Couplet”［英雄対句］（“Iambic Pentametre”：弱強5詩脚）を意識したからではないかと思われる。例えば、Popeが代表するその詩形が醸し出す、一種の重々しさに対して、「洒脱な軽み」を浮き立たせる意図があったのではないか。

（2）原詩は、全編で26曲（Canto）からなる長編詩（原書で361ページ）であるゆえに、分量の関係で、訳出したものを3回に分けて掲載する。今回が、その第一回目ということである。

（3）以下のページすべてに渡って付加する＜脚注＞は、いちいちその旨を指摘しないが、すべて訳者がつけた注釈である。

[2] 原書には目次の欄はなく、ここは、便宜上訳者が付けたものである。

[3] Rudolph Ackermann（1764-1834）: Saxony生まれの英国の美術出版者；1975年にロンドンで版画展を開き、彩色版画を出版；英国に美術作品として石版画を紹介した（『リーダーズ・プラス』）。

間雑誌の出版者でありましたが、その雑誌に、名高い風刺画家ローランドソン氏[4]が、時々装飾画を入れるという仕事に従事されていました。氏の目的は、その記事に付加的な興味を与えるということであり、ある一つの主題に関して、一続きの関連した挿絵を挿入するという決断を下されていたのでありました。文学と芸術への情熱的な愛情を示す幾分風変わりな僧職者であり、また学校長でもある人物による旅行という考えが採択され、同時に図版が毎月継続して描かれたという訳でした。

クーム氏[5]は、その当時、『雑誌』への投稿者として活躍されていましたが、それぞれの図版が完成するごとに、詩で書かれた物語（ナラティヴ）をそれに付け加え、それらを一体のものとして、その雑誌の翌月号において出版したのです。その画家と詩人は互いに独立して仕事をし、事前の計画もなく、また互いの仕事ぶりとか意図などにはまったくお構いなしに、それは成されたのでありました。そして、後になってその全体が一冊の書物として出版されては、このクラスの出版物に前例のないほどの多数の読者の注視の目が注がれ、また愛情が注がれる結果となったのでありました。

学識深いシンタックス博士という著者の生涯に関しましては、彼の経歴の発端を特徴づけている不摂生ゆえに特異なのではなくて、彼の成熟した歳月を性格付ける異様な集中力と、彼が名声の絶頂に達した時期の、その遅さゆえの特異さが目立つ訳です。そして、彼の生涯における幾つかの特徴は、世間様に受け入れられて然るべき性質のものと想定されます。

ウィリアム・クーム氏は、恵まれた環境に置かれた両親から生まれました。両親は、彼をまずイートン校へと送り、やがて相応しい時期に、オックスフォードへと送りました。彼の叔父、ロンドンで議員をやっていたアレクサンダー氏

---

[4] Thomas Rowlandson（1756-1827）: 英国の画家；Napoleon など、当時の政治家や社会を風刺（『ジーニアス英和』）

[5] William Combe（1741-1823）: 英国の冒険家・著述家；父の遺産をもとに放縦な生活を送るが、1780 年以降は大部分を負債者刑務所で過ごす；風刺・政治パンフレットを書き、また *Tours of Dr Syntax*（1812, 続編 1820,21）は、Thomas Rowlandson の挿絵とともに有名（『リーダーズ・プラス』）。

なる人物（a Mr. Alexander）は、彼に６千ポンドを遺しましたが、それを元手にして、彼は法律を勉強する決意をしました。このような目的を抱いて、彼は大学を離れ、法学院（ザ・テンプル）に入学して、その後法廷に招かれた訳でした。しかしながら、彼の優雅ないでたちと精神的な素養ゆえに、社交界へと導かれて行き、結果的に己れの身の程を遥かに超える金銭的な浪費の道に押し流されて、彼は、最終的に苦悩の深みに嵌ってしまったのです。彼の全盛期には、彼の身に着ける衣裳と優雅な振舞い全体が、その極めて貴族的な身のこなしと相まって、彼に、クーム公爵（Duke Combe）なる称号を身につけさせたものでした。

そのように彼を襲った緊急事態が、遂には、彼を兵士として入隊することよう促したのです。そうして、ウルバーハンプトン（Wolverhampton）でのこと、埃っぽい大通りを這うようにして行進し、疲れきった足取りをしたある旧友に、彼の部隊へと入隊するよう勧められました。その友は言います。「きみをこんなところで見かけるなんて、クームよ、しかもナップサックを背負っているきみに会うなんて、夢ではないだろうか。」堕ちた英雄は、こう答える。「バカなことを！哲学者たるもの、何だって背負うものさ。」彼が宿営していた宿舎では、彼の文学的な素養が周囲の驚愕を引き起こし、その宿舎は、このギリシャ語の分かる兵士を一目見ようと訪れる顧客で、夜毎、満員になる始末でした。その時、この町にロジャー・ケンブル[6]が、巡業中の仲間と一緒に滞在していましたが、彼に扶助金を与えてくれ、そのおかげで、彼は除隊の資格を得たのでした。そして、その際に、ある演説を行い、己れの置かれた異常な状況の謎をいつしか解明するのだという趣旨のほのめかしを提示しながら、自分に纏わる様々な噂話にも言及したあとで、ただ、以下のように締めくくるだけでした。「さて、紳士淑女諸君、私が如何なる人物であるか、それを語るときがきたようです。私は、紳士淑女諸君、あなたの最も卑しい、感謝心に溢れた、下僕です。」そう言って、彼は姿を消しました。そして、このあとまもなく、昔の大学の友人が、彼がウェールズの温泉場にある酒場で、給仕補として働いているのを見

[6] Roger Kemble（1721-1802）: 英国の巡業劇団の団長；みずから Falstaff などの役を演じた（『リーダーズ・プラス』）

かけたとのことですが、その後すぐに彼はあるフランス軍に入隊します。また別の時には、彼の緊急事態の際の振る舞いが、フランスの修道院のスープ壺にまで魅惑を添えたというので、彼は僧服までも身に付けようとしました。僧侶たちが、彼の改宗を何とか遂げさせようとし、また、必須の人物試験を行っているあいだに、しかしながら、彼の事態は好転し、また他の見通しも開けてきたので、彼は再びロンドンにやって来ました。ここでは、書店の店員としての仕事にありついて、完全に己れを、文学的な研究の道に置いたのでした。彼は2度結婚しましたが、最初の妻については、殆ど何も知られていません。二番目の妻は、画家コズウェイ[7]の妹でした。彼女は、愛想の良い、愛情深い女性であり、人々の賞賛するような振る舞いでもって、夫の不器用な生き様がしばしば彼に強要していた苦痛を、物質的にも和らげることができたということでございます。1806年に、そしてその後しばらくの間は、彼は『タイムズ紙』でも仕事をしました。

1808年に、彼は金銭的な苦境に陥って、王座裁判所（the King's Bench）に連れられて行き、そこで、生涯の最後の15年を過ごして、最後には、80歳になった頃の1823年に他界しました。

その彼は、監禁状態に逆に魅惑されていたので、後年、彼の友人たちが彼の釈放のために手筈を整えたいと申し出た際にも、その際に被るかも知れない面倒事を頭に描いて、彼らの援助の手を拒絶したのでした。そして、もし自分が、再び自由の身になって、ロンドン界隈で最も快適な場所で身を立てたとしても、己れの活動領域まで選択しなければならないだろうと考えるだけで、当惑してしまうに違いないと考えてもいました。

普通ならば、精神の弾力性が萎えてしまうような、老年という時期になっても、若い日々の機敏さを特徴づける、かの知性の泉めいたものすべてを、彼は依然として保持しており、また、虚弱さが老齢の身体にさらに荷物を付加する時にあっても、彼の精神の強さは、その荷物に耐えるだけの力を持ってもいた

---

[7] Richard Cosway（1742-1821）: 英国の画家；肖像画と細密画で人気を博した；Prince of Wales をはじめ宮廷の庇護を受けた（『リーダーズ・プラス』）。

のです。

奇妙に思われるのは、沢山の書き物を、しかも立派に書いた人が、“Mr. Combe”として、その作品に名前をつけようともしなかったことです。たった一つだけ、『シンタックス博士』の後期の版の一つに著者名を付した以外は、すべて無名のままに出版されました。[8]

彼の『魔性列伝（*the Diaboliad*）』のなかに、相争うアイルランドの貴族とその息子の逸話があるのですが、二人の間の憎しみが余りにも激しいものなので、父が息子に対して決闘を申し込むというものです。ただし、その息子の方はそれを拒絶します。挑戦者が父であるという理由からではなくて、彼自身が紳士ではないという理由によってなのでした。

65歳になったころ、彼は、故アッカーマン氏と懇意になり、その後、常に彼ただひとりアッカーマン氏に雇われることになったのですが、その台帳の金銭的な側面が、証拠は不足しているとはいえ、クーム氏の死期の記録を構成しているだろうと思われます。というのも、その紳士が常に意味深くも確認していましたように、「彼は呼吸するのを止めるまでは描くのを止めはしない」人だったからです。二人の間には、かくなる信頼関係が結ばれていましたので、クーム氏の仕事に関する代価については、何の契約事項も結ばれてはいませんでした。金銭の不足が生じるたびに、「20ポンド寄越してくれ」とか「30ポンドを」とかが、交わされたすべてでした。彼は寛大な待遇を受け、利益を産む作品を制作し、そして出版社は満足しました。

王座裁判所の規則は、冗談まじりながら、東印度まで達することが、裁判官

---

[8] この次の一節において、Mr. Combeの著作が列挙されているが、この箇所は和訳しても殆ど意味はないので、列挙されているものをそのまま、下に書き写す。
（1）*Clifton, a Poem*（2）*A Satire on Sir James Wright*（3）*the Diaboliad*（4）*Lord Lyttleton's Letters*（5）*The Devil upon Two Sticks in London*（6）*History of the Thames*（7）*A Letter to the Duchess of Devonshire on Female Education*（8）*Letters from an Italian Nun to an English Noblemen*（a translation from Rousseau）（9）*The Tour of Doctor Syntax in search of the Picturesque*（10）*Westminster Abbey*（11）*History of Oxford*（12）*Dance of Death*（13）*History of the Public Schools of England*（14）*Dance of Life*（15）*Johnny Quae Genus*（16）*Amelia's Letters* etc.

の一人によって宣言されましたが、クーム氏の場合には、確実にストランド通り（the Strand）まで拡張されていました。初期の頃、その界隈に居を定めていた頃は、彼はしばしばアッカーマン氏のテーブルを訪れ、そこで彼は、食べるものに関しては可成りの道楽ぶりを発揮しましたが、唯一の飲み物は、水だけでした。この頃でした、彼が、ローランドソンの、並ぶもののない画筆にユーモアたっぷりの付属品を書いたのは。そして、それが『シンタックス博士のピクチャレスク旅行（*Doctor Syntax's Tour in Search of The Picturesque*）』という題目が与えられて、現在のこの書物の主題を形成したのでした。

ローランドソンなる太陽が沈むと同時に、彼の風刺への趣味―自由奔放な、豪奢な、しかし誇張しすぎる嫌いもある傾向もまた、沈んでしまいました。そして、この点に関して言えば、大衆は、古いスタイルを踏み越えたと揶揄されるかもしれません。他方で手際の良い木版画の技巧と、この数年間における迅速な改善作などは、その芸術家自身に新たな分野を開いてくれましたし、世間様には新たな快楽を与えてくれました。

シンタックス博士が、このような衣装を身に付け、現代が是認する髪型をして、社交界へと再登場する資格を与える仕事は、独創的な才能を持ったアルフレッド・クローキル[9]に委ねられてきました。彼は、彼の被保護者（his protégé）を歓呼の声とともに、公衆の面前へと引き出したと見なされてしかるべきでありますし、また、彼の努力は、陽気な人々向けに注がれている公言されていますものの、もっと重々しい真面目な人々にも十分に適合しているとも言えるものであります。

---

[9] Alfred Crowquill、本名は Alfred Henry Forrester（1804-1872）: 英国の著述家・挿絵画家・美術家（“Wikipedia” より）。

シンタックス博士のピクチャレスク旅行

第一曲

　学校も終え　仕事も片づけて
ギリシャ語とラテン語の学問にも疲れ
善良なるシンタックス博士は　安楽を求め
静かに椅子に座って　心を落ち着ける。
妻は近隣へと出かけては　5
町の噂話にうつつを抜かし
静かなる時を瞑想で過ごすべく
稀にない好機を夫に授けた。
かく座しているや　忙(せわ)しげに群をなす
映像(イメージ)が襲い来て　彼の頭を包囲する。　10
教会では　昇進の見込みはすでになく
いや　それなる望みはすべて絶たれ
副牧師のままで　それで苦労するばかり―
しかし　それに甘んずべきと合点する。
実に　あらゆる安息日には　15
長い８マイルの道を歩んでは
説教し　不平をこぼし　祈りを捧げたものだった。
また善なる人を元気づけ　罪ある人に警告し
機会があれば　夕食にあずかる。
この人を埋葬し　かの人に洗礼を施し　20
人生行路を変えようと　しきりに願う
素朴な人たちを結び合わせては
夫婦の争いにまで手を伸ばす。
かくして　夏の陽の下　また冬の木陰にて
彼の１週間の旅路は　果たし尽くされた来た　25

そうして　収入と言えば　恐らくは　1年にわずか
30ポンドであれば　それでもいいほうだった。
加えて　嵩張る税も　のしかかり
出費は増えるは　苦悩は増すは―
羊肉と牛肉も　パンとビールも　30
すべての物価が　値を高め
加えて　子供たちも　食べることのみ精を出し
書物よりは　食べ物の方に興味を抱く始末。
従って　聖なるクリスマスが来た時は
彼の稼ぎは　更に減り　35
今や　悲しいかな　辛うじて食いつなぐこと―
それさえ　難題となっていた。
この空論家の誇りであった　樺の木でさえ
その価値と費用が増してくると知るや
しばしば　打算的心情に動かされ　40
笞の節約とばかりに　子供を打つのを控えたものだ。
かくして　時期が好転しなければ
己れの学校をも閉鎖せねばならないとは―
運命の　なんと厳しく　何と盲目なのか
現状を打破するには　何をなすべきか―　45
哀れ　シンタックス博士は　思いを巡らせた。
その時に　明るい流星が空を飛び
たちまち　空の暗さを晴らした時に
ある思いが突然　彼の心をよぎり
富と名声への道を　告示してくれた。　50
かくして　彼の面前で　先への見通しが
大きく　更に大きく　拡大し
麗しき空想が　その悲哀にやつれた面貌を
紛らしては　微笑へと変化させていた。

しかしながら　彼が部屋を歩き回り　55
深遠なる思いに浸っていると
博士は　その種の瞑想のさなかに
ある訪問者により　目覚めさせられる―
実に多くの哀れな男の生を悩ますもの―
即ち　妻の訪問のことである。　60
人の良いシンタックス夫人は　貴婦人であるけれど
恐らくは　麗しさの盛りを　10年は過ぎていた。
若き日を飾っていた　花咲く魅惑こそ
今や　消え去っていたのだが　それでも
力への愛は　失ってはいなかった―それを博士は　65
己れには　不都合なことだと理解していた。
彼女の言葉が流れながら溢れ出るときは
彼は　ひたすら「イエス」か「ノー」と答えるだけだった。
ある事件で　怒りを発することになるときは
子供たちの身体を揺すり　また親玉を平手で打ったものだ　70
それだけでなく　ごく些細な仕打ちの仇を討つ時に
両腕に加えて　口も同時にを用いる人だった。
また田舎のいざこざ話に　我々が耳を傾けるとしたら
彼女は　時として爪さえ研ぐ始末であった。
その顔は赤く　形姿はふっくらと―　75
というか丸々とし　ずんぐりしていた。
また機嫌を害して外出する際は
使いに出された「ゆで団子」という出で立ちだった。
長いこと　静かに家に篭ること　それは
この奥方には　耐え難いことだった。　80
生涯を　あわてふためき暮らすこと
彼女もそのような　せわしい妻の一人であった。
そして　褪せゆく美の口実に　家庭の仕事を持ち出しては

夫に告げる　そのような人種の一人であった。

　まさにこのような時であった　新たな野望に　85
火を灯(とも)されては　霊感を受け
この敬虔な男が　両腕を上げたとき
シンタックス夫人が　現れたのは。
仰天した形相で　大きく悲鳴をあげ
いささか豚のような　金切り声をあげて　見つめていた―　90
慎ましい夫が　厳かに　静かに　夕べの椅子を
おずおずと離れてゆくのを―
足取りを変化させながら　今は家の中を
そして今度は家の外を　急ぎ足で駆け回るのを。
最初　彼女は　言葉を発しなかった　95
（長いこと　殆どあったことのない現象だった）
が　次第にその口という器官が熱を帯び
この騒動の原因を　尋ねずにはおれなかった。
博士は微笑みながら　彼の苦しい胸のうちを―
その秘密を打ち明けた　次のように。　100

「座りなさい　いいかい　お前。最愛の妻よ。
「どうかそこに座って　我慢して聞いておくれ。

「私の人生で一度だけ　妻と呼べる人からの
「優しい心情を　受け止めさせておくれ。
「私は　やらなければならないのだよ。真実のところ　105
「我々二人がやらなければいけないことなのだ、いいかい。
「それは神様の使いである優しい霊が齎したものなのだが
「素晴らしいある計画が　私に与えられたので
「この私の夢多き計画に援助の手を差し伸べて
「お前が　相談に乗ってくれれば　110
「新たな日々が訪れるのだよ―新たな時代が現れるのだ―
「そうして　豊かな富が　一年を飾ってくれるのだ。
「そうしたら　私たちは美味な夕食にありつける
「また　自家製のエールの代わりにワインが頂けるという訳だ。
「夏の日には　日光浴をさせるため　115
「私のグリズル[10]を　椅子につかせることもできるだろう。
「お前はどうかと言うに　上品な絹とモスリンを身に付け
「雑貨点の女将（おかみ）よりも　遥かに輝き
「近隣の人たちは　この美しい町で　お前がファッション界に
「火をつける　そう認めざるを得なくなるだろうね。」　120
　「でも　あなた」微笑しながら奥方は言う。
「あなたは私の心を魅了し　そのことが嬉しく思われます。」
　「私は**旅**に出るよ　そうしてその**旅のことを文章にしたい**のだ。
「お前には分かっているね　私のペンがどんな仕事をするのかが―
「そして　私は画筆をも使うつもりだよ。
「馬に乗り　文を**書き**　**素描**をし　**印刷**をする
「こうして　私は大儲けをすることになるだろう
「こちらでは**散文を書き**　あちらでは**詩を書き**

---

[10] 原文では、“Grizzle”。シンタックス博士の愛する牝馬。彼女も、この詩のなかで、重要な “Dramatis Peronae” の一人である。

「至るところで**ピクチャレスクする**[11]だろう。　130
「と言っても　私はすでになされたことをやるだけだ
「恐らくそうだろうが　少しだけ付け加える事柄も出てくるだろう
「あの＜尊大（ポンパス）＞博士を見てみなさい
「彼は一冊の書物でひと財産をなした人なのだ
「もし　私に　彼の書物を打ち負かす質の書物（もの）が書けなければ　135
「帰郷したときに　それを焙（あぶ）って食べてしまおう。
「来週は学校の子供たちはみな　帰省する予定で
「私も　あと１ヶ月の余裕がある
「どうか　私の衣服と現金とそして身の回りのすべてを準備しておくれ
「ラルフ[12]があの灰色の愛馬の面倒を見ている間に。　140
「周りには　私を訝（いぶか）って　嘲笑し嘲（あざけ）る人もいるだろうが
「今日から２週間後には　出発したいものだ
「そして時間という老人が１ヶ月を駆け抜けたとき
「私たちの仕事は　いいかいラヴィー[13]よ　果たされるのだ。
「私は　幸運を求めてさまようだろう　145
「お前は　その間自宅で気軽にしておきなさい。」

　そう語り終え　博士は　その壮大な計画の
荷物の重さを軽くした　また　奥方は喜んだ
昼も夜も　旅に出る博士の前方に
待ち構える苦悩など　微塵も存在しなかった。　150
奥方は　彼の外套の手入れをし　また種々の衣服すべて
大きいものも小さいものも　念入りに繕った。
そして　更に嬉しいことに　財布の中には

---

[11] 原文では “picturesque” を他動詞として使用し、“picturesque it” という表現がなされている。適訳がないのでそのまま「ピクチャレスクする」と訳した。
[12] 召使いの名前。原文は “Ralph”
[13] 原文は “Lovey”。妻への呼びかけ。

1ポンド紙幣が20枚　入れてあった。
こうして準備万端整えて　その逍遥の成功は　155
間違いないものと思われた。
そして遂に　富と名声を獲得出来る瞬間（とき）―
夢にたゆたう瞬間が訪れた。
さほど興味を示さないラルフも　きっかり4時に
グリズルに鞍をつけて　扉の前にやってきた。　160
やがて　常ならぬ雰囲気を醸し出し
博士が　門の前に立っていた。
そして　その背後には彼の忠実な妻の姿が。
「最後にもう一度　私を抱きしめてください」と。
そうして　灰色の馬に跨って　165
合図と共に　彼は出発したのだった。
「ご無事を祈っていますよ」と大きな妻の声。
「さらばだ　達者でな」と彼は答えた。

第二曲

　別れの儀式を済ませ
奥方は家のなかに入り　扉を閉じた。
悲しみの涙が　その目を潤ませることもなく
また　ため息が出る訳でも　さらさらなかった。
そそくさと　日常の仕事に取り掛かり　5
召使を叱っては　また女中にがなりたてた。
シンタックスはどうかと言えば　己れの野望に酔いしれながら
村のなかを　静かに通り過ぎた。
その日の仕事に精を出す村人たちは
すれ違いざまに　口笛を吹き挨拶を交わしたのだけれど　10
博士が通過する際には
その頭を深く垂れ　歌うのを止めてしまった。
彼は　その人々に　重々しく会釈を返し
それから　尖塔を見上げては
囁くような声色で　落胆した胸のうちを　15
次のように　言い放った。
「かの無慈悲な母よ　その我が母なる教会は
「かように　私を躓かせてきた―
「教区牧師（レクター）とか主席司祭（ディーン）となっては　ふんぞり返る
「馬鹿者どもが　数多くいては　20
「毎年毎年　毎日毎日
「安楽な生活を送り　快適な暮らしを送っている
「このような教会は　真実の認識力も不在であるゆえに
「私の学問すべてに　その背中を向けてきたのだ。
「私は　彼女の葡萄園で　過酷な労働をし　25
「その見返りが　この痩せっぽちの報酬だとは。

「私が土地を耕す　すると豊かな教会区司祭(ヴィカー)が
「熟した葡萄を圧搾し　その液体(アルコール)を飲む始末。
「私が羊の群れを養う　すると他の連中が
「マトンの　優れて美味な肉を口にする。　30
「私が蜂の巣を養い　蜂蜜を創る
「すると雄蜂どもが　その金をかすめ取る。
「しかし　今や　よりよき事に心を傾け
「遥かに心地よき労働に専心し
「晴れ晴れとした眺望が　我が視界に見えている。　35
「従って　無慈悲なる母よ　教会よ　さらばだ。」
そのように　怒りに満ちた言葉を列挙して
シンタックス博士は　旅を進めた。

　朝の雲雀(ラーク)が　空高く飛翔し
その歌声で　空に挨拶の音楽を送っている。　40
黒鳥(ブラックバード)がさえずり　鶇(スラッシュ)は
藪のなかから　自由奔放なる調べを送る。
そうすると　生垣と樹木のすべてに渡って
吟遊詩人たちの歌声が谺する。
しかし　シンタックス博士は　深遠なる思いに身を沈め
活気を与えるはずのその歌声にも　耳を貸さず
幾多の夢多き図式を思い描いては
喜ばしき夢にうつつを抜かし
手綱取る手も　緩むことしばし。
一方　グリズルは　主人の命(めい)の意味も分からずに　50
導き手もいないので　駆け足で進んでは　その道が
正しい道か否かは　気にすることもない。
深い谷間を通り　丘に登り
急流を駆け　サラサラと音を立てる小川を横切り

グリズルは　思いを巡らす主人を乗せて　歩んだ。　55
その主人は　未来の富を指折り数え
その荷重な計画に心を寄せる余り
グリズルの進む道さえ　確認しなかった。
こうして　優しい**空想**の力ある愛撫によって
流れ去る多くの時間　気を紛らしていた。　60
また　緩やかに歩み去る**太陽**が　その日の運行の
半ばを駆けていたのを　知るよしもなかった。
我らの悲しみに　快活なる休止を与える
優しい軽快なる　霊よ。
お前は　身体を蚕食する悩みを紛らし　65
また　悲哀に窶(やつ)れた顔に　微笑を与える。
しかし　おお　何と早く幻想とは　消え失せるものなのか。
驢馬の群れにかき乱されて。
耳障りなその鳴き声よ。すると　見よ　その鳴き声が
深遠なる思いから　彼を目覚ました。　70
そうして　あたりを見回し　凝視しながら
博士は　こう言った。というより、言ったようであった。
「私は　どうも道に迷ったらしい。
「ああ　何たる広漠とした荒野を目にしていることか、
「森はなく　一本の木さえないとは。　75
「近くには　道を教えてくれるような　また生気を養うような
「人もいず　また家屋一軒もありはしない。
「今や　道標一つでさえ　ご馳走となるはずなのに
「どこかで酒を飲み何かを食べる―そんな印の一つさえないとは。
「おお　私の目には　何も入ってこない　80
「生きた人間の印でさえも！
「この共有地の回り全体
「男の姿も女の姿も全然見当たらない。

「吠える犬　鳴くおんどりはいないし
「メーという羊も　そしてモーと鳴く牛の群れもない。　85
「そうだ　仮にこの馬たちが鳴き声を上げず
「そうして少しだけの生の印を漏らさなければ
「この私は　悲しい人の住まぬ　ある世界のなかに
「投げ込まれたのだと思うことだろう。
「おお　誑(たぶら)かされた不幸ものよ　この私は　どのようにして　90
「素描さえできない場所へとやってきたのだろう。」

　こうして何をすべきか思案中に
一本の道標が　彼の視界に侵入してきた。
そうして　その心地よい姿を目撃したときに
博士は　馬に拍車をかけては　そこへと急いだ。　95
しかし　公平な学識に悪意を抱いたと見える
ある呑気な　そして無分別な破廉恥漢めが
文字で書かれた標識すべてを　かき消したと見える―
かつては幾つかの方向指示棒が飾りを与えていた筈なのだが。
かくして　解体された標識は長いこと　何らの情報も　100
伝えることのない　一本の棒きれのまま　そこに立っていたのだ。
それは　噂に言われる質の　目的地への方向に導きもせず
またそれを教えもしない　他の案内人さながらだ。
太陽は　明るさと暑さを　今とばかりに増しており
今　子午線の高みに達していた。　105
蒸し暑い正午。冷気を齎す西風(ゼフィルス)でさえ
荒野に　息ひとつ吹きかけはしない。
その時シンタックス博士は叫んだ―「この平野では
「通り抜ける道を探そうとしても　無駄だろう。
「従って　ここで私は運を天に任そうと思う。　110
「そして　誰かが通るのを待っているとしよう。

「しばらくは　あの土手に座って
「哀れなグリズルに　少しだけ草を食べさせよう。
「しかしながら　私の時間も無駄にはできないゆえに
「あの道路標識を素描するとしよう。　115
「軽率な趣味（テイスト）の者は嘲るかもしれないが
「それにはどこか**ピクチャレスクな**趣がある。
「それは光沢はなく　ただ粗雑（ルード）で荒々（ラフ）しい
「そして　表面が苔で美しく覆われている。
「さてさて　私には権利があるぞ（誰にそれを拒めようか？）　120
「この脇に　向こうの驢馬の群れを置いたらよい。
「そうだ　そうだ　うまくゆくぞ。今や、私はこう考える。
「グリズルが水を飲んでいる　あの池は
「向こうへ移されたら　もっとよく見えるだろう
「そして　本当を言えば　その池を川に変えることだって出来る。　125
「この平らな平地を　藪（やぶ）だらけの尾根となし
「水の上には　橋を架けよう。
「他のスケッチ家がなすように　私もそうするのだ。
「いかなるものでも　見えるような形にしよう。
「上品さを与えるため　効果を発揮させるため　130
「いかなる物体も　寄せ集めよう。
「こうして　恐らく真理からは大きく逸れるだろうが
「その光景は　己れの性格を立証出来るのだ。
「趣味のある人とは　ある事物を招き入れ　或いはそれらを
「除外する―この私の権利を疑う人がいるだろうか。　135
「いいや　もし私が景色を美しいと見なすならば
「それは権利以上　いや　それは義務でもあるのだ。
「＜**自然**＞を一線一線写（コピー）し取るような者は
「芸術家としては　輝くことはないであろう。
「＜**自然**＞からある景色を奪い取る人は誰だって　140

「写し取(コピー)ること以上に　改善(インプルーブ)することも義務なのだ。
「あらゆる芸術作品を高めるために
「＜**空想**(ファンシー)＞は　積極的な役割を演じるべきなのだ。
「こうして私は（誇る人はないだろうが）
「一本の杭から一つの＜風景(ランドスケイプ)＞を作り出したのだ。」　145

「ここまでは　すべてよし。でも誰ひとり通るものはいない。
「この愛馬たち以外に　生き物もいない。
「そして　ここに座って彼らが鳴くのを聞くとしたら
「私も彼らと同じ下等なものとなってしまうであろう。
「それだから　ここを離れよう。向こうの丘へ行けば　150
「多分　町を眺めることが出来ると思う。
「或いは　樹木の間にのぞく高い尖塔が
「私の旅に疲れた魂を　いやしてくれるだろう。」

　やがて　再びグリズルにまたがって
鞭を振るっては　駆け去ってゆく。　155
しかしながら　周囲には　薄汚れた緑地ばかり
聳える尖塔もなく　町の姿も見当たらない。
しかし　最後に彼は踏みならされた道路にたどり着く。
その光景は　何たる喜びを齎したことか。
かくして　彼は気持ちも晴れ晴れとして突き進み　160
間もなく　堂々たる森へと到達する。
その森では　爽やかな西風が戯れており
木陰の大気を　ひんやりとさせていた。
おお　息苦しい暑さから　微風のそよぎへの
何たる変化ぞ　何たるおもてなしぞや。　165
しかし　ああ　人間の喜びの何たる偽りぞ。
私たちがついぞ考えないときに　苦痛が忍び寄る。

というのも　今や　激しい激烈なる突進をして
3人の無法者が藪から飛び出したのだった。

一人はグリズルの足を止め　手綱を掴み　170
全員で　博士の脳髄を脅迫する始末。
哀れ　シンタックス博士は　恐怖でうち震え
己れより勝る力にはうち勝てず
彼らの野蛮な快楽の餌食となった。
全財産もろともに　己れの財布を渡した。　175
しかしながら　博士の目が　後を追い
追跡するのを恐れながら
その狡猾な盗賊どもは　当然　博士も
馬を降りる筈だと　賢明にも予測済みだった。
そして　彼を木に縛り付ければ　180
より安心と　思いなし
1本の木に　素早く彼を縛り付けた。
そして残酷な綱が　彼の身体を幾重にも縛り付け
あらゆる力が　身体から奪われてしっかりと木に結び付けられた。
そうして彼は　1人　置き去りにされたのだった。　185

第三曲

　森のなかの道端に
この惨めな状態で　哀れシンタックス博士は立っていた。
その胸は　多くの溜息で膨らんでは
涙が　両方の目に溢れていた。
彼に何が出来ようか。泣き叫ぶことさえ出来なかった。　5
盗賊たちは　彼の動揺を思い出すだろう
その無法者たちは再び彼を取り囲むだろう
そして　彼を縛った場所で　今度は吊るすであろう。
不安定な苦境のなかにある人で

思うに　彼ほど不幸な男はいなかった。　10
そしてこれが全てではなかったのだ。彼の頭はむき出しで
髪の毛のひと房でさえも　覆ってはいなかった。
頑強な盗賊たちが彼を襲った時に
彼の帽子と鬘（かつら）も　彼を見捨てていたのだ。
昆虫の群れが　飛び回る。彼らの仕事は　15
ブンブン鳴いては　ちくりと刺すこと。
そうしてすぐに　本能のままか　或いは自然に教わったのか
彼の剥き出しの頭を　彼らは求めた。そうして
博士の皮膚の繊細な生地の内側に
小さなフォークを　突き刺した。　20
彼は怒り狂い怒号を上げたが　すべて虚しい
苦痛を和らげる　いかなる手段も見当たらない。
彼を樹木に縛り付けていた綱も
両の手がもがいても　何も助けには至らない。
頭を振り　顔をよじりながら　25
目は苦悩に溢れ　また顔をしかめて
己れの不幸を　かく独白したのだった。

「ああ　惨めなるかな」 彼は叫ぶ。
「何たる危難が　私を待ち受けていたことか。
「このような哀れな憂鬱状態で　30
「私は　ああ　我慢して待つべきなのだろうか
「ある優しい人が現れて　たまたま私を発見し
「友情厚く　この綱を解いてくれるのを。
「いいや　多分私は夜通し　ここに留まるのだろう
「ここは　人通りのない場所なのだから。　35
「しかし　この飢えと喉の渇きと　更に恐怖を抱きながら
「夜通し　このまま居続けることなど　出来ない相談だ。

「おまけに　仮に私がこの苦難に耐ええたとしても
「蜂どもが　生きたまま私を喰らい尽くすのが落ちなのだ。
「何という狂気じみた野心が　私を彷徨(さまよ)わせたのか。　40
「ああ　何故私は我が家を離れたのか。
「ああ　あそこ　災難から遠く離れた　我が住居よ。
「我が食事は美味で　家庭は暖かかったのに。
「そして　争いからは逃れられなかったけれど
「生を脅かす　他の苦悩があったには違いないけれど　45
「それでも　私には　夜毎の叱責に耐え　日々の悩みをも
「乗り越える　十分の知恵が備わっていたのだ。
「幾多の季節を乗り越えて
「最後には深い休息を見つけていた筈なのに。
「**運命の女神**(フェイト)も　私の末永き釈放に捺印していたであろうに。　50
「そうしてシンタックスは　平和のうちに他界したはずなのに。
「このように全てを剥奪され　縛られ　殴られ
「生きながら　昆虫の餌食になることなど　なかった筈なのだ。」

　しかし　こうして**運命の女神**に毒づいて
また**幸運の女神**(フォーチュン)の怒れる渋面を嘆いているときに　55
彼は　犬が吠えながら近づくのを　耳にした。
それは　彼の耳には　音楽のような優しい響きであった。
すぐに　救いの手が確実に現れるだろう。
それは　しばしば　家にいれば　嵐を告示するはずの
普通の形姿を纏(まと)っていたが　60
それは　天使の姿を現して
今　彼に　即座の釈放を約束していた。
かの**ラ・マンチャ**の勇敢な**騎士**でさえ
その光景に　私以上に喜んではいなかった筈だ。
その時　愛と畏怖の念に打たれて　65

我が**ダルシニア**が　まず彼の目に映ったのだった。[14]
というのも　二頭の速歩（トロッティング・バルフレイ）で歩む馬が現れて
しかも　それぞれに美しき貴婦人が跨っているではないか。
二人は　彼の姿が目に入るや　仰天し
また　馬たちも驚いた。　70
犬は　侮辱するいでたちで　彼に対処し
あたかも　彼に食らいつくことを願っているかのようであった。
哀れな声を出しながら　博士は　恭順な気持ちで　祈って待った
彼らが脇道に逸れるか　または援助を授けるか　いずれかを。
その時に　二人の婦人は　素早く馬から降りて　75
慈悲深い寛大さを共に持ち
ナイフを取り出しては　綱を切り
哀れなる囚人を　解放したのだった。
感謝に溢れて　シンタックス博士が　身の上話を語ると
彼女たちは　彼の運命を共に嘆いては　同情心を示した。　80
その慎ましい貴婦人たちは　彼の悲しみを慰め
救済を　差し出すというよりは　申し出た。
そうして　彼女らは　踏みならされた道路を脇に逸れ
たっぷりと膨らんだ荷物篭を　鞍から下ろす。
そうするうちに　土手のうえに　彼の弱り果てた気持ちを　85
活気づける光景が　現れた。
彼女たちは　快活な上品さで　食物を広げ
その場所で　宴を開いたのだ。
そしてまた　幸いなるか　解放されたときに
彼は　己れの帽子と鬘（かつら）が　そばにあるのを発見した。　90

---

[14] 原文は “La Mancha’s val’rous Knight”（l.63）と “His Dulcinea”（l.66）となっており、言うまでもなく、ドン・キホーテと彼が憧れた田舎娘ドルシニアのことに言及している。

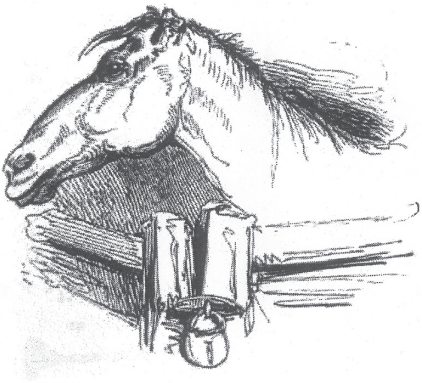
こうして　鬘をつけ　また帽子を被っては
博士は　草の上にうずくまってしまった。
そうしながら　空高くへと　両の目をあげて
感謝混じりの言葉を発した。
「こうなのだ」と　恭しく彼は語った。「気品のある行いに関して　95
「私たちが　聖なる書物で読むものは。
「そして　こうして　我が苦しみの中でも
「私は　**荒野のマナ**を発見した。
「これは隠者の食物。しかしながら　有り難や　神様
「それを与えしは　この優しい貴婦人方。」　100
敬虔なる隠者には　なるほど　パンと凝乳と
そして果物とがふさわしい。
しかし　シンタックス博士は　彼らの食事が
ベーコンをも含んでいるものと　勘違いをしていた。
あるいは　我らの善良な博士が今そうであるように　105
神様に仕える気高い人々にも　ビールが供給されますように。
こうして　この親切な貴婦人たちは　なにひとつ忌み嫌わずに
博士が　両方を味わうよう　配慮を示した。

　遂には　告別の時が来て
2人は　互いに異なる道を進んでいった。　110
優しいお別れ　優しいキスを
彼は　全身全霊でもって　2人に与えた。
それから　のろのろと歩き　また歩き
次のように　博士は　独り言を言った。
「思うに　これはいいことなのだ　これ以上悪くもならない　115
「私は　ただ　財布を無くしただけではないか。
「あの残虐さと苦痛を受けたにもかかわらず
「あの無法者たちは　些細な利益を手にしただけなのだ。

「あの哀れな４プラス４ペンスだけが　強引に奪った財宝のすべて
「それが彼らの力を計る尺度なのだ。　120
「恐らく彼らには　予見出来なかったものと見える
「私に　裏張りのなかの隠しポケットがあることを。
「感謝すべきは　我が愛しの妻。紙幣の全てが
「外套のなかに　キチンと縫い込んであるとは。
「しかし　グリズルは何処なのだ。まあ　あいつのことは気にすまい。　125
「じきにその鳴き声が聞かれ　姿を現すだろうから。」
こう呟きながら　彼は　その日の災難に心を奪われ
曲がりくねる道を　辿り行く。
尤も　博士は　その日の恵みに満ちた
賜物を預かったことも　しっかりと心に収めていたのだが。　130
そうして30分も歩かぬうちに
彼は　教区の尖塔が聳える光景を目にした。
そして　辛い疲労感に圧倒されながら
一軒の旅籠（はたご）が　彼を客として迎え入れた。
しかしながら　それでも　心は晴れず　135
彼は　放浪する愛馬のことを　思いめぐらしていた。
それゆえに　彼は町の触れ役を遣わして
グリズルのいそうな場所を　探させた。

　一方　恩知らずのグリズルは　主人を忘れ
彼が受けた難儀には無頓着に　140
縛られた主人を置き去りにして　己れの道を突き進んでいた。
小麦や干し草に出会えることのみ　期待して。
しかし　そうは問屋がおろさなかったので
彼女は　草の生い茂る牧草地を探し求めていた。
そうするうちに　ある農夫が　そこで彼女を発見し　145
小作人の**ジョン**に　彼女を監禁するよう　命令した。

さてさて　**ジョン**なる男　名うての戯(おど)け者の一人にて
しばしば　災難を冗談と取り違える輩であった。
そして　再び飼い主が　自分の馬を見れば
（多分　紳士ならば卒倒するしれないが）　150
彼女が耳を切られ　毛を切られている[15]のを見ては
喜びながら目を見張ると　そう考えた。
いずれにしても　彼はその悪ふざけをやってのけた。
言うよりは　行うが易しという訳である。
しかし　グリズルは忍耐強い動物であって　155
餌にありつけるかどうか　さほど気にもかけていなかった。
他の多くの者と同じように　人生の最高善とは
肉とアルコールだと　考える傾向にあり
明日　ご馳走にありつけるならば
今日は　心配も悲しみもしない　そのような者と同じに　160
グリズルは　不毛なる監禁所の
縄張りを　歩き回りながら
飢えた気分で　かく嘶(いなな)くかに見えた。



[15] 動物の耳や毛を目印となるよう、切り取ること。

「もし　私に水と小麦と干し草が与えられるならば
「このように　自分の運命を嘆くことはないだろうし　165
「また　耳と尻尾の喪失を　悲しむこともないだろう。」

　そうするうちに　博士は　安らかに宿を取り
大酒を飲むは　浮かれ騒ぐはで過ごし
宿の女将（おかみ）は　あらん限りの美食を並べ
最高のビフテキに　最強のビールを振舞う。　170
そして愛嬌の篭ったおしゃべりで　ひと時
彼を慰めた。「さあ　これを召し上がれ。さあ　あれをお召しあれ。
「尊師様は　多くの驚愕経験をなされたのだから
「ご気分の回復には　肉とアルコールが一番ですよ。」
尊師殿は　かの黄金ルールを賞賛したが　175
また　己れの食物を　冷ますわけにもゆかなかった。
そして　彼は　アルコールを飲み干した後で
背後を振り返って　眺め回した。
扉の周囲に集まった人々へ　一部始終
かの陰鬱な物語を　語って聞かせた。　180
その土地の人々は　彼をしきりに凝視し
仰天しつつ　彼の苦難に聞き入った。
無法者たちが　いかに　彼の身体に縄を巻きつけたか。
彼らが　いかに　彼を木に縛り付けたのか。
彼の拘束状態を解き　その悲しみを癒すべく　185
いかに　天使たちが　救いにやってきたのか。
現金を奪われ　更に悪いことに
鞍も　鞍の荷物入れも　そして馬までも。
こうして　彼の言葉が語る苦難の話に
彼らが　素朴に注意を傾けていると　190
見よ　グリズルのすっかり変わった姿が現れた

尻尾は半分　耳も半分だけになり。
「法律はないのか」博士は叫ぶ。
「沢山あります」弁護士が急いで答える。
「私を雇って下さい。さすれば　かの盗賊どもは　195
「麻紐で縛って　絞首台に吊るすでしょう。
「今　あなたがご覧のような姿に　あなたの馬を不具にした男
「その破廉恥漢は　法律に駆除させましょう。」
「いいや」と博士は言う。「どうかご容赦を。
「私は　今日十分　盗賊に出会った。　200
「私は４シリングと１グロート銀貨[16]を失った。
「しかし　あなたは　私の外套を脱がせた。
「そして耳と尻尾では　あなたを太らすことは出来ない
「あなたは　頭と死体をも必要とするでしょう。」
彼は　頭を撫でながら　忍び笑いをした　205
一同は　その彼の冗談を楽しんだ。
だがしかし　その動物が苦境にあるのを見ることは
とても悲しいことだった。
しかし　怒れるシンタックスに　何が出来ようか。
焦って　心を痛めても　すべて虚しかった。　210
たっぷりと品物が入ったカバンは　スケッチ道具すべてと共に
無事　取り返されたではないか。
探し求めていた鞍も　わずかな支出で
すぐさま　運び込まれた。
従って　彼は　脅しを止めて　怒りを抑えることが　215
遥かに賢明なことだと考えた
そして　彼の不具にされた馬を
宿の馬丁の注意深い配慮に委ねた。

---

[16] “a groat”= グロート銀貨（17 世紀頃まで流通してた英国の４ペンス銀貨）。

そして　哀れなグリズルは　危難から逃れ
今は　飼い葉桶全体を平らげて　綺麗に片付けた。　220
シンタックス博士は　他方で　痛む頭を鎮めるために
パイプをたっぷりと吹かしたあと　ベッドについた。

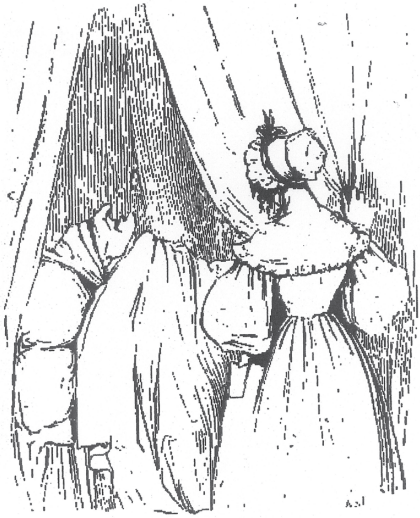
第四曲

　幸いなるかな　**キホーテ**の槍と標的を携えし者
―　そう昔の人は語った。
幸いなるかな　我らの疲れし身体の中へと
眠りの神に　忍び込むよう　最初に教えし者は。
そして　人間的な悲しみに　休息という　5
忘却のマントを　優しく与えし者は。
万歳！馨しき力よ　汝は　人間の悩みなる
絶えざる荒廃の地を　修復することが出来
憔(やつ)れし心に　救済を与え
その悲哀に　休息の期間を与える。　10

夜の間に　優しく心を鎮めながら　昼間は顔をしかめる
脅威の嵐を鎮静させることが出来るのだ。
未加工の火打石にて　悲惨な者を活気づけ
涙を　微笑へと変形させる。
このように　眠りに包まれて　シンタックス博士は横たわる。
昼間の禍（わざわい）をすべて忘れて。
それほどにぐっすりと眠り　それほどに安らかな休息であった
また　悪夢に悩まされることもなく。
完全な安らかさで　彼はうっとりとした心地であり
美しい朝の訪れも　気づかない有様だった。
挙句は　宿の女将でさえ　かくも長い睡眠は
身体に毒ではと思い込み
女中を遣わして　階下には
朝食が準備されたと告げさせた。
ベティは　それから寝室の扉を開けて
床を静かに進みきて
カーテンを　ひとつひとつ開けた。
そうして　ロンドンの叫びを飾るような
限りなく耳をつんざく声色で
「起床の時間ですよ」と　がなりたてた。
その騒音で　彼の平和な眠りも打ち壊れ
鼾（いびき）をひとつ２つかいては　目を覚ました。

　さてさて　博士が頭を向けると
ベティは　ベッドの脇で　挨拶を送る。
「美しいメイドさん　何故ここへ来たのかね」
「旦那さま　１日が過ぎゆくことをお知らせに。
「そして　あなた様の朝の礼拝のためのお食事を
「準備するのが　私の仕事でございます。

「薬缶が沸き立っています。そして私は　パンを焼くには
「ちょっとした有名人の一人でございます。
「旦那さま　コーヒーもお茶も肉もございます
「そして　あなた様は　食欲もおありの筈です。
「と言いますのも　このベッドに横たわられてから
「たっぷりと　10時間が過ぎていますもの。」



博士は　開いた目をこすりながら
両腕を延ばし　起き上がり始めた。
しかしベティは　慎み深くそこに立ち
彼が命令を下すのを　待っていた。
「向こうへゆきなさい」彼は叫ぶ。「何か美味しいものを！
「すぐに　あなたを追いかけよう。」

　そうして　見よ　彼を。休息で癒(いや)され
顎(あご)は綺麗に髭(ひげ)が剃られ　鬘(かつら)を被って

厳かな雰囲気で　朝の知らせを精査しながら
歓迎の朝食に　舌鼓を打った。
そうして　十分な朝食を済ませたあとで　55
グリズルも　扉のところへと連れてこられた。
また　ベティには　宿賃が相当なものになっている―
そう告げるよう　命令が下されていた。
ベティは　博士の意志に従って
会釈をしながら　勘定書を手渡した。　60
博士が　長いページに目をやると
頭を揺すり　大きく溜息をついた。
「私は　何たる悲運の持ち主ぞ。どこへ足を運ぼうと
「出会うは　敵ばかりではないか。
「どこを彷徨(さまよ)っても　欺かれ　65
「詐欺に会い　虐待されるだけなのか。」
こうして　彼がそれぞれの項目を読み終えた時
女将が現れ　居間の扉を開いた。
そこで　シンタックス博士は　真面目な顔つきで起き上がり
かように　激しい議論の口火を切った。　70

シンタックス

「優しいご婦人よ。さあ　勘定書きをお返ししますぞ。
「後生だから　少し値引きしてくれないか。
「仮に私が主教であれ　一介の貴族であっても
「このような代金は　支払う余裕さえありはしないよ。
「私も　信徒会仲間の誰よりも　自分を　75
「人のよい人間だと　思ってはいるのだが
「豊かな幸運の女神に飾られて
「彼らが　いかに富と名誉に満ち溢れていても
「この私には　かくも長々と書かれた勘定書きに

「支払う能力も　力もありはしない。　80
「ひょっとしたら　私は読み間違っているのだろうか。
「確かに　この下欄には　いいかね
「巨額な総計―　１ポンド３シリングと書いてある。」

女将（おかみ）

「請求額は公正　極めて明快になされている筈です。　85
「あなたがものを食べられれば、お支払いなされるのは当たり前。
「私の勘定書きは　馬車で乗り付けられる貴族やその奥方様からも
「このような叱責を受けたことなぞ　ございません。
「この宿は　＜**王冠亭**（ローヤル・クラウン）＞と呼ばれていまして
「この町全体における　第一級クラスの宿舎でございます。　90
「紳士階級の人たちが　毎日利用なされて
「お客様となられては　寛大にお支払いをいただいております。
「更に付け加えますなら　あなた様は　夜ここにいらした―
「まさに　盗賊から逃れられたばかりで　飢えと恐怖で
「半分は死んだようになられて。」

シンタックス

「それは間違いないことだが　95

「今度は　お前さんに　すべてを剥奪されねばならないのか。」

女将

「旦那様　それ間違っておいでです。失礼な言葉で申し訳ないのですが

「あなたは　嘘をついておられると　言いたいところです。

「昨夜　確実に私は　あなた様を宿泊させました。」

シンタックス

「いかにも　それには間違いはないのだが　もし私が今支払えば　100

「今日もまた　あなたは私を宿泊させるのではないか。」

女将

「あなた様には　精選したお食事を提供させていただきました。

「最上の肉と　最上のビール。

「そして最高のベッドで　あなたは高鼾（いびき）をかきながら

「お休みになられました。繰り返しますが　すべて＜**最高の**＞です。　105

「他の方ならば味わえないようなお茶に

「パン塊全体から　最高のトーストをしつらえて。」

シンタックス

「あなたの肉と　ビールとお茶。それらに対して

「寛大な計らいで請求される。有り難や　1ポンド3シリング。」

女将

「それは無に等しい安さでございますよ。私　よく存知あげています。　110

「田舎の副司祭様たちの間で　事情がどうなっていますかを。

「布の商いに関しても　不親切な取引を致しますのは

「私の忌み嫌うことでございます。
「いいえ　私は罪人でございますから　しばしば
「お腹を空かした牧師（クラーク）さんたちには　夕食を差し上げているのでございますよ。

シンタックス

「諺にあるではないか　みなよく知っている筈だが―
「つまり　牧師（クラーク）に代わって　支払いは主任司祭（バーソン）が行うのだと。
「そして　あなたが主任司祭への勘定書きを書くときはいつも
「そんなことを肝に銘じながら　十分に仕事を果たしていると信じるのだ。
「言うまでもないことだが　真実を言えば　1ポンド3シリングは
「私の家族を養う1週間分の金額になるよ。
「愛するシンタックス夫人がこの奇怪な紙切れを見れば
「彼女は　気絶してしまうであろう。」

女将

「誓って申しますが　もしあなた様の生活がそうでしたら
「使いの方も奥様も　両方とも飢え死になされることでしょうね。」　125

シンタックス

「女将　いいかね　もし私の妻がここに来たら
「あなたと同じ流儀で　挨拶するだろうよ。
「同じように激烈な視線を向けて　同じような甲高い声を張り上げて。
「そして　勘定書きを訂正させることだろう。」

女将

「付け加えになりますが　あなたの馬がいただいた　あの小麦と　130
「あの干し草の山―それに対しても　お支払いはなされないのでしょうか。
「それから　耳を狩られ　尻尾も切られた　その痛みに対し
「軟膏（なんこう）を用意して　癒（いや）して差し上げた　そのことにも。」

シンタックス

「あいつの尻尾を切り　あいつの耳を狩った　あの男が
「今度は　大鋏（はさみ）をここへ持って来てくれたらと　願うだけだよ。　135
「そうして　同じ腕を披露して　この
「お前さんの法外な勘定書きを切って　刈り取ってくれたらと。
「しかし　今は　私には時間がないのだ。ここを立ち去るよ。
「1ポンド3シリングを支払うことはできないままに。
「で　お前さんが　その代金の半額を受け取ってくれたら　140
「やがて　全額の調整をするつもりだ。
「それ　代金だよ。お分かりですね。
「隣人愛という姿勢で　お別れしよう。」

女将

「分かりました。慈善的な行いと承って
「同意致しましょう。さあ　お馬に乗って　145
「直ちに旅行へお出かけになるように。
「しかし　十分ご承知のように　どこへあなたが旅をなされようと
「その**慈善**は　ここ　故郷で始まるものです。」

第五曲

　博士は微笑し　代金が支払われ
女将は　彼をメイドに任せる。
そこに　ベティは　恭しく立ち尽くし
その目に　ある期待を表している。
博士が　確実に善良な男であり　5
別れ際に　何かをプレゼントしてくれるだろうと。
さて　**自然**は気紛れなことをたまたまやるもので

ベティに　薔薇色の頬を授けていて
濡れ羽色の髪の毛を　生まれながらの巻き毛を描いて
その首の周りで　揺れさせていた。　10
彷徨う蜜蜂でさえも　彼女の突き出された唇の
甘美な汁を啜りたく思うであろう。
余りに赤く　余りに誘惑的な光景だったので

まさしく　それが博士が強く欲望したことであった。
「何と可愛いお嬢ちゃん」彼はそう言って微笑んだ。　15
「私が？」と作り笑いをしてメイドは答える。
「誓っていうが　まさにそうだよ。お前がキスひとつ与えてくれるなら
「私は褒美に　1シリングをお前にあげよう。」
「旦那さま　もしお心にお変りがありませんならば
「その贈り物を2倍にして　2回のキスを差し上げますわ。」　20
博士は　内心の快楽を意識して　陰気に笑った
そして　直ちにこの「買われた財宝」を掴(つか)まえた。
「おお　きみの唇は　蜂蜜のように甘いね。

「さあ　もう１回だ。そしてこれが代金だ。」
この愛すべき儀式が終わると　25
博士は　扉の方へと歩いて行った。
そこには　彼の哀れな傷ついた愛馬が現れた
尻尾と耳の惨状をつぶさに示しながら。
隣人たちは　皆　博士が門を出立するのを
今か今かと　待ち望んでいた。　30
というのも　田舎町というか　こんな村の緑地では
博士のような姿を見ることは殆どなかったから。
労働者たちは　彼が通るのを見るために　静かに立っていた
そして　若者は　男も女も　そこに集まって
その聖人を嘲り　馬を憐れむために　35
走り出て　お祭り騒ぎを楽しんだ。
しかし　誰もかれもが　一同に宣言した。
これこそ　田舎の祝祭には格好の光景であり
踊る熊よりも　遥かによい　と。

　遂に　女や男や少女や少年たちから―　40
あれやこれやの騒ぎから　脱出して
細路地の片隅で
博士は　己れの苦悩に　言葉を与えた。
「いかなる片隅でも　いかなる場所でも
「困惑と辱(はずかし)めを受けるのが　45
「どうやら　私の不幸な宿命らしい。
「昨日　私は　思い描いた富を求めて
「旅をするため　家を離れたが
「思うに　悪意以外の何も私には訪れない。
「確かに　邪悪な悪魔めが　私に付き添っっているのだ。　50
「東方からやってきた　破滅の悪魔だ

「人間と獣両方にとって　命取りとなる敵だ。
「そいつは　破壊的な行為をして暴れまわるのを好んでいて
「馬もその主人をも　病気にしてまう奴だ。
「グリズルは　5年たっぷりと　いやそれ以上　55
「凱旋行列で　トランペット吹きを　乗せていた。
「彼女は　困難な戦にも立ち会い
「数多くの血なまぐさい争いを目撃してきた。
「そして　戦争の怒号の脅威に直面しながら
「傷ひとつ負わずに　それを逃れてきたのだった。　60
「そして　生の盛りが過ぎた年齢になった今
「この不名誉の傷を　遂に意識する羽目になった。
「おお　この愚かな主人に　何が出来ようか。
「お前と同じように　この主人も切られ抉(えぐ)られたのだ。
「しかし　華麗な避難場所ももはやなく　65
「また勇壮な歩みとは言えないながらも　お前はお前の道を行くがいい。
「勇壮な騎士を乗せて　武装した軍隊を
「戦争の行為にまで　導くがよい。
「お前が足を持っている限りは　お前は
「平和の使者を運ぶのを　辞めるではないぞ。　70
「長いことお前はそれなる人物を運んでは　不平も言わず
「仰天もせず　蹴ったり躓(ひざまづ)くことも決してなかった。」

　しかし最も温和な**自然**も　時々は
その性格の厳しい規則から離れて　過ちを犯すことがある。
臆病な小鳥も　その子を守るのであるし　75
獣も　突き刺されれば　蹴るであろう。
燃えるような暑さであった。蠅の大群が
毒ある刺を逆立てて　彼らの周りに湧き上がった。
彼らは　グリズルの傷ついた患部に襲い掛かり

彼女は　直ちに鼻を鳴らしては　驚くばかり。　80
背後を蹴り上げ　前方に立ち上がり
更に　多くの奇怪な行動を取るばかり。
博士はなだめすかしたが　すべて虚しかった。
彼女は鼻を鳴らし　蹴り上げ　更にまた立ち上がった。
「悲しいことよ！」シンタックス博士は言った。「たった今　85
「私が蹄鉄(ていてつ)工の店に立ち寄ることが出来たなら
「彼の軟膏(なんこう)でもって　哀れなグリズルの耳と尻尾とを
「救助してあげる手立てもあろうものを。」
そして　彼が己れの願いを口に出すが早いか
雲のような煙が立ち上るのを発見した。　90
それは　鍛冶炉から立ち上っているように見え
一瞬だけ　大空をヴェールで覆った。

一方で　彼の耳に届く荒々しい金槌(かなづち)の音が
乞い求めた救いが　間近にあることを告げていた。

道端に一軒の田舎家が聳(そび)えており　95
その家の周りには　多くの柳の木が育っていた。
そこで　シンタックス博士は　哀願する声色で
グリズルの傷を見せ　救いを懇願した。
すると煤(すす)だらけの**ガーレン**が現れ
希望あふれるいでたちで　博士を迎えた。　100
「旦那さん　私はよい膏薬(こうやく)を持っていますよ。
「その馬も　きっと苦しみを癒(いや)すでしょうよ。
「そして　適切な技術と配慮でもって
「私が手当をしている間に
「旦那は　向こうの東屋で　お食事を取りなされ。　105
「涼しいパイプを吹かし　ビールも飲んで。
「私は長いあいだ　二つの仕事を専門にしておりました
「人間と動物の両方に薬を売っているのでございます。」

　シンタックス博士は　ひんやりとした木陰を探し
ガーレンの妻君が　夕餉をこしらえる。　110
彼女は　客人を喜ばせるすべを熟知していて
そうして　肉とパンとチーズを付け加えた。
更には　彼女は自家製のエイルを飲みにやってきて
その村の物語を語ってくれた―
いかに　かの笑いを愛する牧師が　115
時々やってきては　アルコールを楽しむのかと。
そして彼らの陽気な地主が　角笛と猟犬を操って
いかに　狐刈りで名声は馳せているのかを。
この牧師は　美に勝る一人娘を持っており
彼女だけが　牧師の唯一の後継者だということ。　120
しかし　彼女は誇りが高く　紳士でさえ近づいて
己れの恋の火を告白することなどできなかったと。

ある貴族のみを　彼女は　自分の寝室に
入れることが出来たという噂である。
この村全体に渡って　あらゆる名前が　125
この奥方の格好の主題となっていた。
そして　こうして彼女が話す役割を演じては
遂に　博士はここを去るときが来たと考えた。
　さて　その時に　膏薬を尻尾に貼られ　耳にも貼られて
哀れや　グリズルが　再び姿を現した。　130
しかし　今や　かように貼りめぐされて
蚊や蠅の痛い刺を　突っぱねることが出来た。
博士は　腹一杯に食事を詰め込んで
一言も言わずに　勘定書きの支払いを済ませた。
しかし　すでに一日の終わりとあって　135
彼は　急ぎ足で　道を突き進んでいった。
そして　太陽がその光をしまい込む前に
一軒の宿が　一晩のために彼を受け入れた。
身体は疲れ　心はふさぎ込み
パンチをひと飲みしては　憩いに就いた。　140
朝が来て　彼は　静かな休息ゆえに
元気を回復して　起き上がった。
そして　女中が茶の準備をしている間
彼が部屋を見回すと　人間の喜び
そして人間の悲しみを歌った歌が　145
その壁に掲げてあるのを見出した。
窓も彼の目を素早く捉え
その済んだ窓ガラスには　多くの**詩の女神**（ミューズ）が書いた
雑多の作品が　書かれていた。
それらを摘みとってみるだけで十分の数に達した。　150
そして「本当に！」と彼は言う。「何とかして

「これらの詩行のいくつかを　私の書物に写し取りたいものだ。
「ここには　真面目な詩も機知に溢れる詩もあるようだ
「また　かなり美しい詩もあるのが分かる。」
己れの外套の小さなポケットから　155
彼はメモ帳を取り出して　書き写した
詩に溢れた窓ガラスが記載している物は何でも。
そして　中でも　特に下記の優れた詩を書きとった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

「愛に溢れしこの胸が　鏡で作られているのなら
「きみが　そこを通るのを見ることが出来るなら　160
「おお　我が永久に愛する美しきキティよ
「そこにきみ自身の美しき映像を　きみは見るだろう。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・

「かつて私は　海賊としてここに来た
「この美しい荘園で狩猟をしたのだ
「もし地主がそれを否定するなら　165
「この鏡が言うだろう―地主は嘘つきと。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ドリーは　いかなる豚より太ってる。
「もし　私が誤っていなければ
「誓っていうが　ドリーは夫のベーコンを
「綺麗に片付ける才がある。」　170

・・・・・・・・・・・・・・・・・

「愛しのジェニーよ。きみの名前を聞くたびに
　「常久の火照りで　我が胸は燃え立つ。
「そして　きみの目に出会うとき　ジェニーよ
　「我が羽ばたく胸は　もはや鼓動だにしない。
「我は夢みる　されど　きみの姿は　我が視界には　175

「常に存在するとは　限らない。
「我目を覚ます。されど　我が虚ろなる心は
「目覚めたとは言え　もはやきみを夢見さえしない。
「我　あらゆる集まりにて　乙女たちを見るのだけれど
「きみのよう　その微笑みは偽りで　姿だけが美しい。　180
「されど　きみは　世の中を渡り歩くのだろうけれど
「我と似し　真実の心の持ち主を発見すべきだろう。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「我　美しきロンドンの町より
「ここに来たれり。
「穏やかで優しいルーシーと共に。　185
「しかしルーシーは冷たくなり
「我を　馬鹿呼ばわりし
「我　仰天し　その子を見捨てたり。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

こうして　博士が喜びに満ちて
詩の女神が　書かせたすべてを　写し取っていると　190
盗み癖があると覚しき　飢えた犬が現れ
朝食のご馳走の半分を奪って　走り去った。
他方　薬缶（やかん）をもって入室したドリーは
キスを約束した筈と　言い張る男―
熱情を持った博士に付き纏（まと）われていた。　195
そして　博士が　蕩（とろ）ける至福を抱いた時に
熱く沸き立ち　傾いた薬缶の注ぎ口から
茹（ゆ）でたった流れが　溢れ出ては
素早く　彼の靴の両方にまで落ちかかり
博士は　詩の女神から　追放された。　200

第六曲

　この月下の　奇しき世界には
何と種々の災難が　人間を待ち受けていることぞ。
快楽で　活気付けられたと思うや否や
悲哀が訪れ　痛みに悩まされる。
彼の唇が開けられて　5
束の間の幸せの輝きを祝う　まさにその時に
黒い雲が　大空を曇らせて
悲しみの惨めな雫(しずく)が　彼の目を満たすのだ。

　こうして　博士が微笑みながら
澄んだ鏡から　機知ある書物を盗み書きしている間に　10
その快楽を遮るように　己れの足に
火傷させる苦痛が襲うのを感じた。
恍惚状態から目覚めさせられて
博士は　飛び跳ね　踊り回り始めた。
「靴を脱ぐのだ！」彼は喚(わめ)いた。　15
「そして　ゲートルの紐をほどけ。」
一方で　ドリーは素早い手つきで
直ちに　声高の命令に従った。
そして　彼が椅子の上で足を垂らしていると
その足と踝(くるぶし)が　むき出しになった。　20
乙女は　己れが犯した過ちを償うべく
大慌てで　部屋を駆け出しては
大急ぎで　液体容器を持って戻ってきては
彼の足と踝を　さすり続けた。
そして　その可憐な行いは　功を奏した。　25

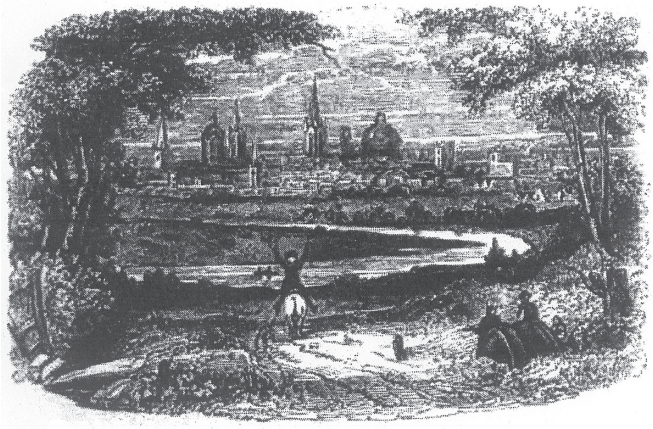
それはすぐさま　燃える痛みを和らげた。
そしてドリーの頬には大粒の涙。
あたかも心が張り裂けんばかりの溜息をついた。
「可愛い子。そのように心配せずとも大丈夫。
シンタックスは言う。「私はなんともないよ。　30
「怒りも　苦痛と一緒に消え失せた。
「いいね　私はこれ以上　嘆きはしないよ。
「なぜならば　私の惨状を癒すべく
「かくも美しい乙女が　膏薬を提供してくれるのだから。」
このように　博士はドリーの悩みを紛らわし　35
彼女の涙を　微笑に変えた。
彼女は　博士の痛む患部を冷やしながら
一方で　博士の心を温めていた。
そうして　彼女が患部に軟膏を塗り込むと
彼はドリーの頬をつねっては　彼女の顎を軽く叩いた。　40
そして　彼女が博士の足にゲートルを履かせると
彼は　キスしながら　感謝の心を伝えた。
気立てのよいドリーは　忌み嫌うでもなく
同意して微笑みながら　その両者[17]を受け入れた。
彼女は言う。「旦那さまは　もう一晩滞在なされませんか。　45
「今日は　更に旅行を続けられることもお控え遊ばせ。」
そして　彼女はそのようなことを微笑んで言ったが
彼は心に決めた目的を楽しむべく
和やかな会話をそこで打ち切り
グリズルを　門に連れてくるよう依頼した。　50

　さてさて　博士は　何患うこともなく　道を歩んだ。

---

[17] ここでいう「両者」とは、「キス」と「感謝の心」の両方を言う。

そして日が落ちるまで　旅を続けた。
その時に　彼の疲れた目を喜ばせるよう
彼の前に　**オックスフォード**の並み居る塔が聳(そび)え立っていた。



「おお　我が母校よ。」シンタックスは叫んだ。　55
「我が現在の自慢の種よ　若き日の誇りよ。
「おお　汝の母の如き配慮に　私はすべてを負っているのだ
「忘れてしまったすべて　知っているすべてを。
「どうぞ　あなたの乳飲み子からの　敬意の気持ちを
「彼が与えうる限りの　感謝の念を　受け取りください。　60
「万歳！　聖なる　永遠に名誉ある木陰よ。
「しばしば　そこで　私は不滅の乙女に求愛したのだった
「夜明け頃に　しばしば散歩の足を速めながら
「私の足が　何と夜露を払い除けたことだろう。
「アイシス川とチャーウェル川[18]の辺りで　65

[18] 原文は “Isis and Cherwell's stream” となっている。「アイシス川」は「the Thames の Oxford とその上流での呼び名」であり、「チャーウェル川」は「イングランド中部 Northamptonshire から Oxfordshire を南流し Oxford で the Thames に流れ込む」（いずれも『リーダーズ英和辞典』）

「いかに　私は古典的な夢を織り
「孤独な隠遁所にいる　青ざめた学問に出会うために
「薄暗い回廊を訪ねたことか。
「あなたの姿は　再び私の胸に
「昔の情熱の炎を掻き立てる。　70
「再び私は　その温和な輝きを感じ
「悲しみの半分を　すっかり忘れることが出来る。
「そして　私の痛む心すべてを　語ることだってできるだろう―
「これ　この光景にお分かれを告げて以来　初めの気持ちだ。」

　こうしてシンタックス博士は　学的な優雅さに囲まれて　75
厳かな歩みぶりで　動き回る。
グリズルは　彼を背負って町を抜け
「**マイター亭**」にて　彼を降ろす。
夜は　健康な休息で過ごされたが
時計が９時を打ったとき　彼は起き上がった。　80
そして床屋が　その腕前を披露して
彼をきれいに剃りあげ　美しい男へと変身させた。
そして　彼から教えられたことなのだが　彼のかつての学友―
かの**ディッキー・ボンド**が
その有り余る学識すべてに対する報酬として　85
彼の学寮の学寮長に推薦されていることを知った。
そうして　彼が　１年に少なくとも 1,200 ポンドを
稼いでいるという　そんな評判もあるということを。
「おお　そうか　たまげたね。それならば
「この旅を急ぐよりは　少し遅らせて　90
「一日くらいは　我が友ディッキーと
「過ごした方がいいだろう」そうシンタックスは言う。
彼はそこを急いで立ち去り　やがて友を発見。

そして安堵感を　身体中に発散させた。
その学寮長は　この幸福なる再会を喜び　95
互いに穏やかで心温まる会釈を交わした後で
質問をすべく　彼は語り始めた。
その会話は　下記のごとし・・・

学寮長

「善良なるシンタックス博士。私は　もう一度
「昔知っていたその声を聞くことが出来　何より嬉しい。　100
「きみがここに滞在して　私たちと食事をし
「今日は　学寮の聖餐を共にしてくれると有難いのだが。
「この前　互いを見合った時から
「実に多くの歳月が経過し　過ぎ去ったね。
「**運命の女神**（フォーチュン）は　私には優しい配分をしてくれた　105
「わが友よ　きみに明白にお分かりのとおりにね。
「彼女は　きみにはどのような配分をしたのか　聞きたいものだ。」

シンタックス

「悲しいことだ！　私は道化を演じてきたよ。
「妻を娶り　学校を経営してはいるが
「きみがご馳走をたらふく食しているのに　110
「私は　パンに塗るバターにさえ　殆どありつけない始末。」

学寮長

「私に関して言えば　私は結婚はしていない
「そして　きみの計画が成功しなかったと聞いて　悲しく思うよ。
「でも　こうして私の大事な友が　今来てくれた
「この訪問が　きっと　きみの運命を改善してくれると思う。　115
「どうか望むものなら　何でも私に命令してくれないか。

「私は　全身全霊をもって　それを果たす積もりだ。
「そうして　ここに滞在するのをよしとするならば
「私のこの家をきみの家にしてくれたっていいんだよ。」

シンタックス

「いいや　きみは儚い夢に過ぎないと思うかもしれないが　120
「私は　ある計画にのっとって　旅を続けねばならないのだ。
「かの名高い**湖水**[19]を　一目見て
「この**旅行**をもとに　**一冊の書物**を書く予定なのだ。」

学寮長

「私には十分にきみのこと　分かっている積もりだ。現代だけでなく
「古典的な知識も　きみがたっぷりと備えていることを。　125
「そして　確実に言えることだが　重みある学識と
「批評的な知識をたっぷり備えたきみだから
「きみは　必ずや　評判の高い作品を生み出して
「財布を満たし　名声を高めること　請けあうよ。
「私たちは　何としばしば　古代の聖者たちが教えたことを　130
「一緒になって　勉強したことだろう。」

シンタックス

「私が　今感じるのは　きみの沢山の知識も
「すべて　きみの大学内部だけに閉じ込められているということだ。
「学問そのものが　大いなる退屈ごととなってしまっている。
「あの情熱も　ずーっと長いこと　終わってしまっているのではないか。　135
「今は　本屋でさえ　馬車を持ち
「結婚の際には　１万ポンドをも要求出来るだろう。

---

[19] 原文は “the fam'd Lakes” とあるが、「湖水地方」の湖を指しているのは間違いがない。

「広場に　大邸宅を建て
「田舎の空気を求める家も　建てることが出来る。
「その男が　例えば**ホラティウス**が　詩で書いたか散文で書いたのか　140
「知っている可能性だって　否定できやしない。
「<**ギ・・・博士**[20]> は　もしも　毎年毎年
「その旅行譚をうまく料理して　書物にしていなかったら
「馬車に乗ることが出来たであろうか
「また　毎日をワインを片手に過ごすことだ出来ただろうか。　145
「流暢で　けばけばしい　華やかなスタイルが
「怠惰でだるい朝を　紛らしてくれたのではないか。
「しかも　１頁置きごとに　アクアチント版画で
「美しい光景を　プリントして・・・
「そのような書物なのだよ　私が創作したいのは。　150
「そうして　作品は必ずや　成功すると思っている。
「知恵深いきみは　おそらく非難するかもしれないが
「頭の単純な民衆は　きっとそれを買ってくれるだろう。
「私も　そのような書物は　単なるごみ屑としか思わないけれど
「それでも　現ナマをたっぷりと供給してくれる筈なのだ。」　155

学寮長

「言うまでもなく　我ら二人がここで学友だった頃とは
「事情は　同じではなくなっているだろうけれど
「それでも　私はきみの成功を疑いはしないよ。
「そして　あらゆる幸いを祈るばかりだ。
「私自身は言うまでもなく　この学寮の全職員たちも　160

---

[20] 原文は “Doctor　G----” となっているが、ここは『ピクチャレスクに関する３つの試論』その他の「ピクチャレスク」関係書物で名声を博した Rev. Gilpin を指して、風刺しているのは間違いがない。

「きみの成功をあてにしながら　献金してくれるだろう。」

　ここで　学寮のホールでの
夕食へと誘う鐘が鳴り始める。
もてなしの豊かさに操られて　招かれる客人のうち
時刻に遅れる人は　誰もいなかった。　165
形式上の挨拶が終わると　めいめいが自分の椅子に座り
食器一式を　手に掴んだ。

学寮長は　長としての誇りを示して
シンタックス博士を　自分の脇に座らせた。
やがて　彼らは　煙を上げるステーキを運ぶ者たちの　170
急ぐ足の　その足音を聞いていた。

　料理皿が　それ相応に現れてくるのを　見てみたまえ。
先頭には魚類が　しんがりには牛肉が。
しかしながら　おお　行列を先導していた者が
歩みを一歩間違えたか　あるいは不注意に歩んだか　175
または　ある悪魔の悪意ある力に呪われたのか

大理石の床の上に　頭から倒れこんだのだ。
ああ　不注意な男よ。ああ　可哀想なお皿よ。
ああ　贅沢の極みであった魚料理よ。
すべて　こうして一瞬のうちに　台無しにされ残飯となった。　180
ああ　もう二度と食されることはない代物よ。
しかし　この足の踏み誤りには　後が続いた。
それがもとで　彼らはみな　互いの身体の上に転げ込んだのだった。
すると　通路はたちまち　火で焼かれ　湯でたかれ　油で揚げられ
またシチュウに入れられた肉類で　一面覆われた。　185
給仕たちは悲鳴をあげ　彼らの背中には
熱くたぎるソースが浴びせかけられた。皿たちはガタガタ音をたて
様々に不協和を起こした。他方で　その大騒ぎは
大広間を仰天させ　反響音を響かせた。
ある教官は言う。「私は罪人なのだから　190
「どこかよそへ行って　夕食を取ろう。」
学寮長は答える。「そんなこと　ありませんよ。
「すぐに　また満足が行くよう　手筈も整いますよ。
「私たちの数はわずかに 10 人。料理はたっぷりとある筈です。
「私は　20 人分はたっぷりの料理を注文していますから。　195
「我が友人たちよ　臀肉は大丈夫だよ
「鶏のローストも　茹でた七面鳥も。
「鹿肉のパイも　大丈夫。
「濃密なプディングも　安全で確実だ。
「更にハムも　更に多くの上等な代物も　200
「タルトもカスタードも　たっぷりと揃っていますよ。
「さあ　切り分けながら　たっぷりと召し上がれ。
「今日は　私たち　飢え死にすることはないでしょうよ。
「それでも　この間抜けたちが台無しにしたご馳走のため
「償いをたっぷりとしていただかなければならないでしょうね。」　205

こうして　それぞれの目は　そこに出現した
豊かな代物に素早く反応し　煌めいた。
彼らは食べ　彼らは飲み　彼らは煙草をふかし　お喋りをした。
そして　学寮の庭を回遊した。
しかし　時は来た（時間は飛ぶものだから）　210
シンタックスが　別れを告げる　その時が。
彼の舌は　その感情を言い表すことは殆ど出来ず
「さよなら」さえ　言葉にならない程であった。
その寛大な心根と心情を分ち持った
学寮長も　彼にこう告げたのみであった。　215
「友人が欲しくなった時には　この**ディッキー・ベンド**に
「手紙を書くか　直接足を運びたまへ」と。

次の日の　朝早く
シンタックス博士は　旅を再開した。
道中　彼はのんびりと歩みながら　220
多くの懐かしい光景を目撃したが
もし　**オックスフォード**がうまく描ければ
己れの書物に風采が加わるだろう　彼はそう思った。
好奇心に満ちて　周囲を見渡すと
高くなった地面の一区画が現れた―　225
そこからならば　町の諸々の塔が
一層美しい絵画を構成するだろう
そこに　**ラドクリッフ**のドームが介入し
モードリン[21]の塔が　光景を飾り上げるだろう。
そこで　グリズルを生垣に繋いで　230
彼はその方向へと　慌てるように進んで行った。

---

[21] “Radcliff’s dome”, “Magd’len tower”: いずれも Oxford 大学の学寮の建物。

しかしながら　己れの芸術を披露すべき
その適所を選ぼうとした　その矢先
一頭の邪悪な牡牛が　彼を見ては　すぐさま
大きな怒号をあげ　直ちに彼を追いかけた。　235
博士は　危難が近づくのを知り
恐怖という翼に乗って　迅速に飛び
軽快に　１本の木によじ登ったが
その木が　安心感をたっぷりと　彼に与えた。
しかし　次には　ベーコンを掬(すく)いに行った時　240
彼は　帽子と鬘(かつら)に見捨てられ
おまけに　スケッチブックまでもが
悪戯風(いたずら)の餌食となって　背後に飛ばされた。
この大騒動に仰天したグリズルは
生垣を破壊し　飛び跳ね回った。　245
シンタックスは　今尚　驚愕で震えながら
全力を込めて　その木にしがみついていた。
彼は　助けを乞い求めた―すると　助けは近くにいたのだ。
犬と　男たちと　少年たちが　現れた。
そこで　彼の敵は遂に降参するよう強いられ　250
再び　彼はその野原の主人になった。
もはや　怒号する牡牛を恐れる必要はなく
保護してくれたその木の木陰を立ち去った。
そして　牧場を歩き回るうちに
帽子と鬘とスケッチブックを　発見した。　255
「さあこちらへ。私のおばさん」と博士は言った。
忠実な馬は　その呼びかけに応じ
そこで　再び博士は　鞍に跨って
背後を見返ることもなく　立ち去って行った。

第七曲

　深い瞑想に囚われて
丘を下り　坂道を登り
荒野を抜け　森を抜けて
シンタックス博士は　哀愁を帯びた道を辿って行った。
そして　彼の思いは　家に残した妻君へと　5
切なく　さ迷い始めていた。
愛する夫が　遥か遠くを彷徨(さまよ)っているあいだ
過ぎ行く日々を　いかに彼女は過ごしているだろうか。
二人は　確かに口喧嘩することはあったとしても
お互いに対して　密やかな親愛の気持ちは抱き続けていた。　10
夫の学問的な蓄えを　夫の古典への知識と
深い教養とを　誇りに思い
シンタックス夫人は　いかなる言葉をもってしても
夫の愛情深さを大事に思い　貶(けな)すことはなかった。
更には　彼女は　騒動のときも勤勉のさいにも　15
まさに　蜜蜂そのものであった。
そして　時々は　博士を苦しめる
尖った刺を　持ってはいたけれど
彼女は　まず第一に　家庭の繁栄を心がけ
いわば　蜂蜜を巣へと運び込む女性であった。　20
博士もまた　最初に彼女の腕をとったときの
その彼女の魅力を忘れたことはなかった。
というのも　仮に報告が真実ならば
彼女は　若い日には　それなりの美人であったとか。
魅力ある**ドリー**こそ　町中での評判の花形である―　25

そういう形で　よく知られた人だった。
そして　この貴婦人が21歳となって以来
多くの歳月が流れたとはいえ
彼女は　昔のままの　美しい女性としての
雰囲気と風采を　今なお保っていた。　30

このような訳で（勿論他の魅力も加わるのだが）
彼女は　実際に博士の自慢の種だった。
それだけでなく　時々は　昔のような
愛に満ちた視線で　彼女をじっと眺めてもいた。
そして　彼女が何をし　また何を言おうとも　35
彼は沈黙を守り　彼女に従順であった。
このような訳で　こう言って　彼は心を心を慰めていた。
「口喧(くちやかま)し屋は　古典的なものなのだ。
「太古の書物が記録しているところによれば
「**ザンティッペ**[22]の言葉は　剣のようだった。　40
「彼女の年齢は　我がドリーと同じくらい。
「そして高名な聖者の援助者だった。
「そうして　昔の　かの**ソクラテス**も
「同じような迫害を被ったのだ。
「そんな善良な男　そして偉大なる男の運命を　45
「分かち合ったとて　私も恥じるには及ばない。」

今や　二人が分かれてから　5日が経過した。
彼は　変わらずに　優しい心を維持していた。
彼は　哀れな溜息を耳にするたびに

[22] 原文は、“Zantippe”とあるが、ソクラテスの妻で、悪妻の代名詞ともなっている“Xanthippe”［クサンティッペ］への仄めかしであると思われる。

キリスト教徒としての共感を　常に感じる質(たち)であった。。　50
子供たちの間では　定規と鞭を持ち
半神のごとき存在であったのだが―
そして　華麗な言葉遣いで話しながら
俗衆を　驚嘆の念で捉えたものであったが―
また　自尊心高く　僧職の誇りをもって　55
大通りを　風切って歩いたものだったのだが―
また　彼の異形の風采が　通りすがりの微笑みと
そして　通りすがりの冗談をも挑発したのであったが―
それでいて　高貴な者たちの間にも　また俗人の間にも
彼には　敵と呼ばれる者は一人もいなかった。　60
回りが彼を冷やかすのは承知していたけれど
彼らが笑う一方で　それも彼を愛するがゆえであった。
従って　故郷から遠く離れているとはいえ
彼の頭が動揺し　また溜息が出てくるとしても無理もないことだった。
こうして　彼は優しい気持ちで旅を続け　65
そうして　太陽も傾く一日に　終止符を打った。

　しかし　悲しみと同時に心が晴れると
見よ　近くに優しげな田舎家が見える。
空中に高く揺れている看板が
その旅人を休息へと手招きしているではないか。　70
そこで　彼は安らかな気持ちでご馳走を食べ
水煙管(きせる)を吹かしながら　泡立つビールを楽しむのだ。
博士は　大きな声で指令を出すと
彼のそばに　宿の亭主が立っている。
彼は　いつもの状態に　愛馬を残して　75
くぐり門を　通って進んだ。
宿の女将が扉を開けると　扉も喜び

そうして　その貧しい宿が提供できる食物を―
その質素な食卓に乗せることが出来る
慎ましい代物を　詳しく説明する。　80
自家製のナプキンが　すぐに準備され
食卓には　あらゆる食器類が並べられた。
十分に焚かれたベーコンが　次に現れ
新鮮な卵と一緒になって　彼の胃袋を楽しませた。
パリパリしたパイが　林檎と共に並べられ　85
正餐にふさわしく　甘美な味が添えられた。
また　自家製のアルコールも　他の飲み物に混じって
泡立っているのが見られた。
博士は飲み　博士は食べた。
かような暖かいもてなしに　心から喜んだ。　90
それから　静かに煙草に取り掛かり
謙(へりくだ)るような目つきで
女将に問いただす。
この村の名前は何というのか　またどの州に属するかと。
そうして彼らの奉仕に対しては　**天国**への道をすべて　95
教えてあげることが　約束された。

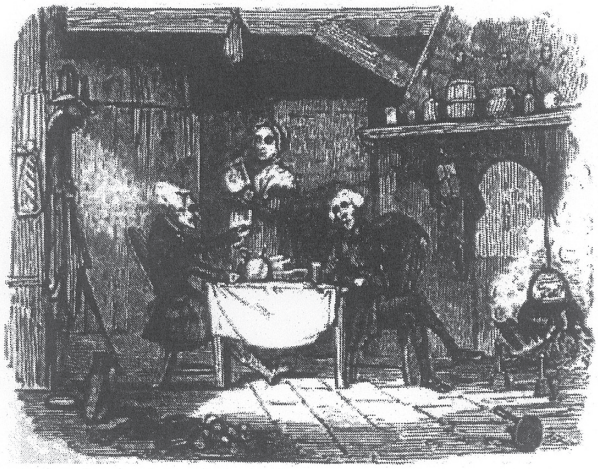
女将(おかみ)

「この土地は　**バウンティ**郷士様のものでございます。
「この州には　あの方より良い人は存在しません。
「教区牧師さまも　そのような方であればと望むのですが―
「＜**締め付け**(スクイーズ・ゼム)＞博士というのが　その人の名前です。　100
「しかし私たちはその方を見たことはありません。恥ずべきことですが。
「そして　裕福さのなかで　その人は肉を切りたっぷり食し
「尊敬すべき副祭司さまは　お祈りをしながら飢えておいでです。」

シンタックス

「その方がここにおられたらと心より　望みます。
「一緒に煙草を吹かし　ビールで乾杯したいものです。　105
「その方も同じでしょうが　見知らぬ人に
「奉仕すること　それが何であるか　私も知っている積りです。」

彼がそう話している丁度その時　副祭司がやって来た。



「このお方です！まさに。」女将は叫んだ。
シンタックスは　兄弟牧師に挨拶をして　110
直ちに着席するよう　乞い求めた。
「さあ　パイプを取りなさい　そしてビールをどうぞ。
「いかなる聖職者にとっても　いかす奴ですぞ。」

副司祭

「悲しいかな　私は聖職者ではありません。私は―
「慎ましい副司祭職に繋がれて　115

「いかに配慮を重ねても　自分の家族さえ
「生かしておくことが出来ない有様です。
「一方で　あの肥満の教区牧師さまは　いかなる貴族にも負けず
「物を食べ　また飲む余裕がおありになる。
「でも　あなた　私は文書き屋に過ぎないし　120
「上にいる人たちへの悪口は　吐きたくありません。」

シンタックス

「それはいいことですな。でも　苦しみを舐めるとき
「不平を言うのも　**自然**の配慮なのです。
「強者が弱者を抑圧するとき
「正義の女神は　盲目ですが　常に弁護してくれるでしょう。　125
「教えてください　あなたは　それなりの謙虚さと
「優雅な態度でもって　ご自身の事情を説明したことはございませんか。
「偉大な者と裕福な者は　おだてられるに違いありません。
「彼らは　賞賛の言葉を浴びせられるが好きなのです。
「いいですか　もし　こうしてあなたが彼らの愛顧を引き寄せようとも　130
「何の危害も生じはしないでしょう。
「例え　あなたが　美しい言葉で　驕れる者が
「あなたの友人となるよう　心を傾けたとしても　です。」

副祭司

「確実に　私は　最も遜(へりくだ)ったスタイルで　手紙を書きました。
「そしてその文面の至る箇所で　あの方の善良さを讃えました。　135
「物価が最近　とても高騰しているので
「私への俸給を　1年に10ポンド上げて欲しいと頼みました。
「そして　実は私には5人の子供がいて
「活発な　可愛くて仕方のない小倅(こせがれ)たちですが
「彼らの哀れな　愛情深い　忠実な母は　140

「やがて　私にもうひとりを授けてくれる予定です。
「一方　かの人は　生きているだけで　確実に
「少なくとも千ポンドが　毎年　入るのです。
「私にも必ずや　愛情を注いで下さり
「私を60ポンドだけで　飢えさせはしないでしょう。　145

シンタックス

「そうそう　一刻も早く　私は聞きたいものだ
「その裕福な人が　どう返事したのかを。
「我が友よ　私には十分　分かるのだ―
「あなたは決して　その目的を手に入れてはいないということを。」

副祭司

「やがて　郵便夫が1通の手紙を持ってきました。
「それは　私に6ペンスと1グロートの費用がかかりました。
「あなた様の　友情溢れるお心でも　その手紙の文面の
「無作法さについては　ご想像もなされないでしょう。
　『きみのような訴えは　うまくは運ばないだろう。
　『というのも　物乞いは　結婚する勇気もないはずだからだ。
　『少なくとも　私はきみを欺くつもりはない。
　『決して　決して　きみを救うことは出来ないだろう。
　『そして　もし　きみがこれ以上　私を困らせるとしたら
　『きみから　その牧師職を剥奪するつもりだ。』　160
「しかし　善良なあなた　私は　控えておくつもりです。
「必ずや　そのことがあなたに苦痛を与えるでしょうから。
「つまり　悪意のなかで　かの年老いた一級の悪党が
「選んで書いたすべてのことを　外部には漏らさずにおきます。
「繰り返しますが　私は　文書(ふみ)きにすぎず　165
「上に立つ人を罵倒するつもりもないのですから。」

シンタックス

「忌々しい！　それは　人を呪わせるに十分なことだ。
「私も　そんな怪物には　我慢ができないね。
「でも　いいかね　友よ。そいつが　その残忍さと
「虚偽の償いをしなければならない日が来て　170
「厳格な神の裁きが下る　大いなる日には
「そいつは　沈んで　きみが　今度は浮かび上がるだろう。」

副司祭

「こう言えば　確かに　礼儀を逸していますが
「あの人は　悪魔の子孫です。
「そして　その生の期間が終えたなら　175
「あの人は　最後にはその父と一緒に住まれるでしょう。
「しかし　私は　文(ふみ)書きに過ぎず
「上に立つ人に　悪態はつきたくないのです。」

　このような形で二人は会話を交わし　またビールを飲んだ。
遂に　薄暗い夕べの影が支配し　180
シンタックスは　それぞれの質問を整理した。
そして　副司祭の手を握りながら
強い意志を持ち　決して絶望しないよう　命令した。
「貧しいものは　神の格別の配慮の下にあるものです。
「わが友よ　あなたは　悪と戦っている　185
「唯一の人ではありません。
「与えられたものに　あなたの身を委ねなさい。
「善良で過ごし　あとは神様にすべてを任せなさい。」
前にも言ったが　シンタックス博士は優しい心の持ち主で
一筋の涙を流した。そうして二人は別れた。　190

　夕方の空は低くなり　こぬか雨が　平野一面に
ヴェールを広げていた。加えて　自家製のあのビールが
彼の内なる人間を　餌食にし始めた。
そして　シンタックス博士は　朦朧とし
居る場所も　行くべき場所も　分からなかった。　195

　その時　一人の活発なる騎士が　彼の傍を通りかかった。
シンタックススは　さほど酔ってはいなかったけれど
シャックリしながら　こう言った。「我が友よ
「この道は　どこか休息出来るところへと
「私を導くのかどうか　教えてくだされ。」　200
「確かに」と答えがあった。「ここから１マイル以内に
「私たちの旅籠（はたご）のなかで　最も優れた宿があり
「じきに　あなたの疲れを癒してくれるでしょう。」
これは　誰あろう　この州全体で非常に愛されている
かの**バウンティ**郷士その人であった。　205
そこで　彼は　冗談にみせかけて
その牧師を　客人として迎える意志を示した。
そうして　馬を走らせ続け　仕える人たちに
友好的な歓待を　準備させようとした。
博士は　ほろ酔い加減でやってきては　210
郷士は　門のところで　彼を招き入れ
居間のほうへと　すぐさま　導いて行った。
それから　安楽椅子に彼を座らせて
ご機嫌はいかがかと　尋ねたものだ。

シンタックス

「地主さま　私は　哀れにも　泥まみれの身　215
「雨に打たれ冷え冷えしています。火をつけてくれませんか。

「そして馬丁に　私の愛馬　グリズルの
「面倒を見てくれるよう　お願いできませんか。
「そして　あなた様の食料庫が提供できるものを
「後生ですから　急いでテーブルに乗せてはくださいませんか。」　220

郷士

「肉屋が刻んだ　あらゆる種類の肉がございますぞ。
「もし　それがお気に召さなければ
「家禽（とり）もございます。そして　お気が召せば
「私の料理人は　フリカッセ[23]の達人ですぞ。」

シンタックス

「お願いですから　我が親切なる友よ　教えてくだされ　225
「どんな種類の鳥や魚をお持ちなのですか。
「更には　慇懃な宿主さま　お教えくだされ
「私めが　どれくらいお支払いすればいいのかを。
「と言いますのも　貧しい牧師は　貴族のように
「美味なるご馳走をいただく余裕もないからです。」　230

郷士

「聖職者の方々が　ここに滞在なされるときは
「決して　決して　お金を請求されることなどございません。
「私は教会を愛します。そして　そのために
「勘定書も　見積書なども　決して作らせません。
「そうして　牧師さまたちが　私の寄与する僅かなものを　235
「受け取り下されば　それが　私の誇りとするところです。」

---

[23] “fricassee”［鶏・子牛・兎などの肉を刻んでホワイトソース（その肉汁）で煮込んだ料理］。

シンタックス

「おお　それならば　友よ。あなたは　頭の良い人だ。
「あなたの旅籠は　いつも満員でしょうな。
「それはご立派な規則ですし　公言すべきことですね。
「しかし　私には　目を瞑(つむ)っていても　冗談が見えますぞ。」　240

郷士

「いいえ　牧師さま。テーブル・クロスも敷かれました。
「あなたは　一文もお支払いなされる必要はございません。」

シンタックス

「私の頭は　まだぼんやりしています。
「ものが二重になって見える気もしています。
「目の前のこのようなおもてなしは　私のような客には　245
「準備されるようなこと　ありえないからです。
「まるで　オリンパスの神々が　自慢するであろうような
「そんなご馳走だと　認めないわけにはゆきません。」

　こうして　シンタックスは　大いに食べ　腹一杯飲んだ
翌朝の勘定書のことなど　意にも介さずに。　250
彼は　ベルを鳴らし　給仕たちを呼んで
自分の靴と　ゲートルを　脱がせてもらった。
「メイドさんに　私が　この痛む頭を休ませる
「ベッドを見せてくれるよう　頼んで頂けないか。
「さあ　私の鬘を取って　ナイト・キャップを持ってきておくれ。　255
「私の瞼は　一眠りをしたがっている感じだ。

「特別扱いは要らないよ。ご機嫌伺いも必要ないよ。
「というのも　大きな欠伸(あくび)が　私の顎(あご)を壊しそうだからだ。」
さて　**キティ**は　博士の鶏冠を飾るため
自分自身のナイト・キャップを持ってきた。　260
そして　自らそれを身につけた後　ピンクのリボンで
何回も何回も　その回りを　巻いて縛った。
このような美しい態度に誘われて　シンタックスは
超豪華な階段を登り　ベッドに就かせられた。
歓楽の声が　屋敷中を支配していた―　265
それも　浮かれ騒ぎが一つに合わさった歓声だったのだけれど
彼にはそれが聞こえなかったし、また　階下で
彼自身が引き起こした快活な雰囲気をも　知ることはなかった。
ともあれ　彼は　疲労感と酒に圧倒されていたので
唸り声をあげ　うめき声を上げて　そして休息についたのだ。　270
しかし　太陽が**テティス**[24]の膝に抱かれて
いつもの彼の眠りを奪ってしまった時に

[24] 原文は “Thetis”: 海の精 Nereids の一人で Peleus との間に Achilles を産んだ。

シンタックスは目を覚ました。そして周囲を見渡すと
その光景が　完全に彼の五感を狼狽させた。
彼は　豪奢に編まれた絹製のベッドに　275
自分の頭を横たえていたのだ　と知った。
華麗なる絨毯が　その床に味を添え
金箔の鋳造物が　扉を飾っていた。
また　姿見も　彼自身の美しい姿を
てっぺんからつま先に至るまで　映し出していた。　280
「もし私の記憶に間違いがなければ」彼は言った。
「昨夜は　貴族気分で　酒を飲んだのだが。
「丁度　あの旅役者が　完全に酔っ払って横たわった時に
「遊びのなかに連れ込まれて
「半日だけ　貴族の一人になされたように　285
「誰かが　私にも同じ幻覚を　自由に生み出して
「悪ふざけを行ったに違いないと思う。
「しかし　私は化粧をしてもらう際にも
「このような秘儀に取り付かれていることにしておこう。
「その正体を見破るためなのだ。ベルを鳴らすとしよう。　290
「寝室係のメイドが　真実を語ってくれるだろう。」
すぐに彼女は姿を現す。低く会釈をしながら
ご用件をお伺いしたいと申し出る。
「いつ　どのようにして　私はこの屋敷に来たのかね。
「良い子だから　教えてくれないか。」　295
「あなた様は　昨夜　さほど遅い時間ではなかったのですが
「この時計が　8時を打つ頃に　ここに見えました。
「そして　ここの召使いたちが言うには
「あなた様が道に迷っておいでだと　そういうことでした。」
「ついでだが、この気高い旅籠は　300
「何と呼ばれているのかね。」「＜**迎賓館**（ウェルカム・ホール）＞です。」

「それでは　この家で　きみを雇っているのはどなたかな。」
「郷士バウンティ様と　その奥方様です。
「ウィリアム卿とその奥方様と　そして　旦那さま
「あなたも　パーティに参加して頂きますよう。　305
「私は命令されているのでございます　あなた様が
「朝のパーティの客人となられるよう　お願いすることを。」

　それ以上は　質問する必要もなく
彼は　その娘に案内してくれるよう　命令した。
おお　何たる痛快な会合であることよ。　310
地主の主人が　心からの挨拶の言葉を述べ
博士を　椅子に座らせた
しかも　若く美しい二人の貴婦人の間に。
シンタックスは　それがすっかり気に入って　お喋りを始め
己れの身の上話のすべてを　語ろうとした。　315
そうして　博士がその奇妙な物語を　弾き出す時に
一同は　大きな声で笑っては　お祭り気分に浸った。
最後に　郷士が己れの仕掛けた冗談を説明すると
博士は　言葉遣い巧みに　こう語った。
「郷士さま　何の言い訳もなさいますな。　315
「あなた様のお楽しみを　私も受け入れるだけであります。
「願わくば　神々が　私が生きるすべての日に
「同じような冗談を　授け賜いますように。」

奥方たちは　博士の長い滞在を懇願したが
シンタックスは言った―　お別れしなければなりますまいと。　320
その後　すぐに　博士はグリズルの背中の人となり
或る新しい冒険を訪ねる旅に出かけて行った。

第八曲

「あらゆる点で　あらゆる意味でも
「人間は　神の摂理の保護にあるもの。
「彼が　誤りの道を歩むとき
「その過ちは　己れに属する。
「また　我らは　運命の女神のご配慮も　或いは　5
「彼女の悪意をも　正しく判断できるとは限らない。
「そればかりか　我らは　何としばしば　喜び勇んで
「視界に入れた煌(きらめ)く幻影を　追いかけて行くことぞ。
「正しく見ることもせず　また理解もせずに
「我らは　それを真実の＜善＞として追跡する。　10
「最後には　空霊なる幻影は飛び去り
「愚かなる期待は　すべて消え去るのだ。
「時々　黒雲が低く立ち込めては
「不幸が生み出す恐ろしい時刻を　脅かす。
「我らは　近づく突風に震え　15
「すべての希望を打ち捨てる。すっかりと顔色を喪って。
「すると　見よ！　その暗闇が消え失せるとき
「燃える太陽が　すべての自然を活気づかせ
「沈んでいた心は　再び　昔の快楽と
「昔の燃える火を　獲得する。　20
「昨夜　私は　未知の道路を通り　雨に打たれて
「平野を彷徨っていた。
「そして＜迎賓館＞のような旅籠に出くわすことを
「我が運命などとも　思ってもいなかった。
「実に　本当を言えば　そこへ私が行ったときに　25
「私は道に迷ったのだとは　言えないのではなかったろうか

「それほどに全ては良く　懐(ふところ)も全然痛まなかったがゆえに。」

　かくシンタックスは瞑想にはまり込み
教訓とすべき思いを　独りごちした。
他方で　グリズルは　生き返り　30
陽気に　準備された道を　ゆっくりと歩いて行った。
昨夜　彼女は　主人の運命を分かち持つことを
何の災難とも　思っていなかった。
彼女は　一流の猟師たちの間に立って
精選された食物を　彼らと共に　食したこともあったのだ。　35
美しい　広々とした厩に入れられて
上品に整えられた様々な衣服に飾られて
哀れなグリズルは　陽気な馬飼人たちのすべてにとって
美しき冗談の種となっていた
丁度　善良な博士自身が　この旅籠(はたご)の　40
親切な貴族たちにとってそうであったように。

　瞑想の力に魅了されて
シンタックスは　時の流れを忘れていた。
そして辺りを見回すと　太陽はすでに
輝く子午線を駆け抜けていたのが分かった。　45
今や　羊飼いの少年を見かけたが
公道の傍らを　彼は　歩いていた。
そして　彷徨(さまよ)う羊の群れに心を奪われて
この若者は　歩きながら口笛を吹いていた。
「心優しい少年よ。多分　きみは知っているだろう　50
「私が酒を飲み　食事が出来る場所に
「挨拶することができるまで　この切ない目をして
「どれくらい　私が歩かないといけないかを。」

「叔父さん　この小高い丘を歩き続けなさいな。
「そうすれば　すぐに近郊の町に着くでしょう。　55
「思うに　30分も経たないうちに
「あの高く聳える塔の傍を通り過ぎることでしょう。
「教会墓地の壁にそって　歩き続けたがいいでしょう。
「そうしたら　すぐにお求めの家に着くでしょうよ。
「看板にはドラゴンがあり　そこで　あなたは　60
「心ゆくまで　食事をし　またお酒が飲めますよ。」
小高いその丘を　シンタックスは横切って進んだ
そして　教会のほうへと　歩みを向けた。
「このようにして」と　シンタックスは言った。「人が
「この世で　あちらこちらへと　投げ出される時に　65
「ある強い衝動が　彼を彷徨わせ
「そして　多分道を失わせる時に
「教会こそは　宗教の聖なるご本尊として。
「だが　おお聞け　死者を弔う鐘の音が
「ある魂の出立を　今告げている。　70
「そうして　寺男もまた　凡ゆる人間的な悲しみが
「終わる場所を　準備しているのが見える。
「そうして　また見てみよ　群れなす墓が現れる！
「ここに　何か異様なものを　私は見る。
「というのも　しばしば　墳墓なる土地を飾るべく　75
「詩的な花々が　見つけられるからだ。
「どれどれ　少しだけ踏み込んで　見学してみよう
「私の書物に役に立つ事柄を　拾ってみようか。
「ある賢者がかつて言った。生あるものは
「死者を読み取ることに喜びを抱くのだと。　80
「いかに貴重な拾得物を　我が書物は　誇れるだろうか
「もし　私が　死という　未知であるが現存する状況から

「ある大事な知らせを齎してくれるかもしれぬ
「お喋りな幽霊に　出会うことができたら。
「経帷子（きょうかたびら）を着た　青ざめた人物の姿　85
「陰鬱なる雲の上に座った輩
「新たに掘られた墓を蹴りあげたり
「或いは悲鳴をあげて　何か恐ろしい詩句を発したり
「或いは　虚ろな墓から　急に飛び出して
「やがて生じるだろう　血なまぐさい行為を予告したり　90
「敵対する骸骨たちと戦いながら
「恐ろしい薄笑いを浮かべ　骨をガラガラ鳴らす輩。
「乙女達に　じっと凝視を迫り
「彼女たちに巻毛を　直立させ
「その美しい姿を　打ち震わせては　95
「彼らが生きているのではと思わせる輩ども。
「そのようにして　流行を追う
「連中には　＜感情の**ピクチャレスク**＞[25]を
「提示する。
「しかし　時間は早く過ぎるものだわい。　100
「亡霊たちは　午後中眠っている。
「あの寺男に尋ねてみるとしよう　夜になれば
「私が　ある霊を見分けることができるかどうかと。」

　博士は　教会法にのっとって
直ちに　教会墓地の門を開ける。　105
グリズルはと言えば　教会墓地の草の味を知っており
自分も入ってゆくのが適切だと判断した。
「旦那さま」と寺男は言う。「あなたの馬は

[25] 原文はイタリック書きで、“The Picturesque of Sentiment!” とある。

「連れ去って頂きたいと申さねばなりません。
「さもないと　私は　直ちに彼女を　馬小屋へと　110
「連れてゆかねばならないでしょう。」

「きみは　間違っているよ。優しい友よ。
「きみがやろうとしていることは　大きな罪作りなんだ。
「牧師の馬は　教会墓地で草を喰むのを
「権利として　主張するだろうよ。　115
「そして　ここで人間の運命を刻んだ符号の間で
「瞑想するに至るがゆえに
「どうか　きみには騒ぎ立ててもらいたくはないし
「この哀れな獣にも　静かに食事をさえてはもらえないだろうか。」
良心のある寺男は　それ以上何も言わず　120
死者のための　己れの仕事に突き進んだ。
一方で　シンタックスは　悲しみの詩の女神が　そこに書いた文字を
批評家のような注意深さで　摘み集めた。

墓碑銘

貧しきトーマスとその妻　ここに憩えり
口論の数　数多（あまた）の生を送りしが　125
すべて　終わりぬ。ご覧（らう）じろ。
彼　口を噤（つぐ）みぬ　また妻も。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

薬と医術が　死すべき我を
不気味な墓より　救うのならば
処方に従い　飲むべきだった　十分なる薬を。　130

さすれば　忙(せわ)しきこの世の　宴(うたげ)を延ばし
あと100年は　生きられたものを。
されど悲しや　なべての医者の　術あれど
薬・丸薬数あれど
読者よ　汝の生と　同じよう　135
確実に　我　ここに送られし。
我　僅(わず)か25歳にして。

・・・・・・・・・・・・・・・・

この墓のなか　一人の恋人　眠れり
若き日に　ドリーの呵責なき瞳に
惹かれては　犠牲者となりし男。　140
ドリーの魅惑ゆえ　ダモンは哀れにも　心を燃やし
残酷なる乙女は　蔑みをその返礼とした。
しかし　5月の華やぎのなかで踊るとき
ドリーは倒れ　ドリーは死んだ。
そして今　ダモンの傍らに横たわる。　145
おお　汝たち　頑なな心を打ち捨て給え。
ドリーの不幸な身の上に　注意なされよ。
ベッドに就くときは　死者の元へゆくよりは
生者の元へ行くほうが　遥かに良いからだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

この芝土のした　一人の兵士眠れり。　150
残虐なる**戦争**は　彼をも容赦せざりき。
彼の墓の前にて　ある乙女　泣いており。
栄光は　そこに月桂樹を植えたり。
名誉が　兵士の報酬にして
生きるか　死ぬかは　運命まかせ。　155

血を流すか　或いは　勝利の雄叫びに加わるか
そのいずれかを選ぶのみ。同じように
真に勇敢な者への月桂樹も
額を飾るか　墓を聖別するかの　いずれかだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

この石の下に　彼女の身体が憩えり。　160
彼女を思えば　我が胸は切なく痛む。
ここで　悲しみの物語を告げるこの涙を
彼女は　知ることもなく　眠っている。
しかし　二人は生きて　愛し続ける望みが
我が苦悩を　和らげてくれるのだ。　165
愛とは　純なる天使の火があれば
決して　決して　消え失せることはありえない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

シンタックスは　ここで　鍬(くわ)に身をもたせかけて
休んでいる寺男に　こう語る。

シンタックス

「私たち二人は　いいかね　友よ　一つの仕事に従事しているのだ　170
「私は　生者のための　きみは　死者のための。
「一体　誰のために　そんなに急いで　しかも楽しげに
「きみは　お墓の準備をしているのかね。」

寺男

「よろしいですか　尊師さま　弁護士の**スラスト**様が
「有り難や　ここで塵となるために　朽ち果てられるのでございます。　175
「これまでの　これほどの喜びを抱いて

「お墓のサイズを測ったことなど　ありません。
「この穴蔵に　彼が横たわれば
「私は　この鋤で土を被せて　固めるでしょう。
「そして　最後の審判へと彼が召喚されるときまで　180
「彼が起き上がらにより　最善の注意を払う積りです。
「そして　また　彼が天のご配慮を懇願する時には
「私は　彼の身代わりをするようなことは望みません。
「かつて　彼は　非情な思いに心を奪われて
「地代の不足の理由で　私の財産を没収しました。　185
「いいえ　念を押しますが　私は罪人ですゆえに
「彼は　我が子の夕食をも奪い去ったのです。
「子供たちが食卓に就いて
「ガツガツと急いで食らっている時に
「彼がやってきては　大きな皿　小さな皿　すべてを　190
「また　パンやミルクのいっさいがっさいを　奪い取ったのです。
「餓鬼どもは　泣きました。母は　祈りました。
「そして　私は　彼の過酷さ加減が和らぐことを求め
「我らの牧師さまに相談し
「すべてを調整してくださるよう　求めたのでした。　195
「だが　彼はその牧師様の言葉を軽蔑し
「私が提訴した訴えを　嘲笑する始末でした。
「彼は　人以上に繁盛する道を知っている男で
「2ポンド支払い　5ポンド利益を得るような輩だったのです。
「遂に癇癪玉（かんしゃくたま）を破裂させて　私は彼を殴り倒し　200
「その残虐な悪漢の脳天をぶち壊したのです。
「そのために　公営獄舎にぶち込まれて
「苦々しい　長い歳月を　半ば飢えて過ごしました。
「しかし　温厚な我らの牧師様が　救済して下さり
「優しく　妻の悲しみをも癒して下さいました。　205

「その牧師様は　私が獄舎に居る間に
「私の家庭全部を支えて下さったのです。
「そして　私が晴れて自由の身になったときに
「ご覧のような用務員として　雇って下さった訳です。
「しかし　博士さま　あの方は　あの世へと逝かれてしまいました。　210
「向こうのあの石の上　壁の上高くに置かれて
「あの方の美徳を現す詩句を　あなたはご覧になれるでしょう。
「そこは　今では蔦の葉が生い茂ってはいますが。
「ああ　あの方のお身体が下で　憩っている一方で
「その魂は　凡ゆる義の人が行くところへと行かれてしまわれた。　215
「あの方は　そのお墓を　深い呻き声を立てながら掘っては
「それが　私自身の身体であったらと望んだものです。
「**死神**が　その尊いお方の頭を横たえた
「大地のベッドを　私は毎日見ているのです。
「そして　雑草の１本が生え出すごとに　220
「それを摘み取っては　涙を注ぐのです。
「教区全体が悲しみました。この広い教区で
「乾いた目は一つもなかったでしょう。
「1 人の目を除いて。＜弁護士＞の鉄の顔を飾るような
「そんな優しい優雅さは　決して現れませんでした。　225
「年寄りは　長いこと付き合った友人を悼み
「若者は　父の喪失に　嘆き悲しんだものです。
「ああ　私たちは　末永く　貧しい者の守護聖人―
「寛大なパトロン様の死を　悼み続けることでしょう。」

　博士は　大きな涙を浮かべながら　230
その寺男の感謝溢れる賛辞に　耳を傾けていた。
そして　あたかも　死者を攪乱するのを恐れるかのように
静かに歩み出て　その石を探し当てた。

こうして　次のような詩句を慎重な声音でもって　読み上げた。

50年の間　この牧師は　235
神の示された道を　歩んだ。
人の理性に栄養を与える
かの聖なる天上のパンにて
50年間　彼は羊の群れを養い
そうして　人の挫けそうな心を強めた。　240
彼の幅広い　もてなしの良い扉は
常に　貧しき者に対して開かれていた。
その賢明な助言を求めて　人々が訪ねてきた
凡ゆる地位の人　凡ゆる年齢の人たちが。
警告し　心を強め　そして救いのために　245
彼は　その賢明な助言を　常に　与えた。
彼は　迷える子羊を探し出し
より良き道を　指し示した。
しかし　彼が痛く大事にしていた美徳を
その微笑でもって　是認している間も　250
彼は　心臓に達するまで　潰瘍に探りを入れるという
より過酷な現実からも　遠ざかることはなく
彼は　厳格に　健全な苦痛を与えては
患部を　もとの健康状態に連れ戻しもするのだった。
こうして　**神の命**を導きとなし　255
彼は生きて　そして平和のうちに　他界した。

シンタックス

「後生だから　友よ　美徳で名高いこの牧師の
「後継者は　どなただろうか。

寺男

「大変尊敬されている　敬虔なお方で
「全力で　善を施されています。　260
「しかし　旦那さま　彼には奥方がおいでなのです。」

シンタックス

「多分　その奥方が　彼の人生をかき乱すのかもしれないな。
「言葉も　時々は　争いを生み出すものだ。」

寺男

「いいえ　奥様もまたご立派なお方です。
「しかし　少なからぬ子供さんがいます。　265
「それも　天のご意志かと思いますが
「6人か7人の子供さんに恵まれておいでです。
「あなたは　私にご同意なされるでしょうが
「家こそが　慈善の適所のような気がするのです。」

シンタックス

「そうですとも。きみの牧師さんでさえ　きみの　270
「今の教えほど　健全なる理論を教えなされことはありますまい。
「さて　善良なる友よ　尋ねてもいいかね
「きみは今　死に関する仕事をしているが
「そして　昼も夜も　しばしば　きみは
「死者たちの荒涼とした館を　歩んでいるのだが　275
「真実のところ　かつてきみは　亡霊を見たと
「自慢して言うことができるかい。」

寺男

「尊師さま、いいえ　ありません。尤も　そのようなものを

「目撃したという人たちは　いるのですが。
「老婦人たちは　呑気なおしゃべりのなかで　280
「幽霊や悪鬼とか　そんな者について語るのですが
「彼らは　夜に　ちらちら灯る火の周りで
「聞き手を　恐怖で満たすのだそうです。
「噂では　名士博士（ドクター・ワージー）とやらが歩きでて
「教会墓地のあちこちを　徘徊するとのことです。　285
「また　しばしば　月があかあかと輝く夜に
「白い衣装を身にまとって　彼の姿が現れるとのこと。
「しかし　かれの魂には　地上を歩く権利は
「与えられていないとのことです。魂は天国に在りますゆえに。
「この場所を横切るときはいつも　私には　290
「霊の顔さえ見えません。
「思い出しますが　かつて　夜遅くに
「大きくて　白い物を見たので
「立ち止まって　それを見つめました
「何と　それは牧師様の葦毛の馬だったのです。　295
「私が信じまするに　そのような存在が
「愚かな人間たちを　しばしば　欺くのでしょう。
「それだから　教区では　魔女たちが　どう踊っていたか
「幽霊たちが　どう歩いていたか　噂話が流れるのです。」

シンタックス

「きみの推理に　大いに賛成だ。　300
「正直なる友よ　しばしのおさらばだ。
「我ら　正しき行いを演じれば　生者であれ
「死者であれ　恐れる必要はないということだ。
「我らの休息を攪乱する亡霊は　305
「我らの胸に巣食う悪しき自意識に過ぎない。

「それでもって　人間は二重に呪われてもいるのだ。」

寺男

「その幽霊は　**弁護士スラスト**に　憑依していました。」

シンタックス

「彼の人生行路は駆け抜けられ　彼の仕事も終わった。
「その邪悪な男は　もはや罪を犯すことも出来ないのだ。　310
「彼は　太陽の下に生きているすべての者に
「裁判が下されるはずの　そんな場所へと行ってしまった。
「生きているときは　きみに辛く当たっただろうが
「だからと言って　復讐の気持ちを抱き続けてはいけないね。
「彼を許したまえ。彼はこんなにも地下深く横たわっているのだからね。
「倒れた敵を踏みつけないようにしたまえ。　315
「もう一度　さらばと言おう。しかし　別れる前に
「きみの心を元気づけるものを　プレゼントしよう。」

寺男

「尊師さま　彼を許すには　まだ
「時間がかかりそうです。そして許すだなんて！
「いいえ　例え彼を許すことは出来ても　320
「生きている間は　彼を忘れることは出来ません。
「あなたの素晴らしいプレゼント　神様にも感謝です。
「どうぞ　あなた様もご健康でお幸せであられますよう。
「今後は毎日　お恵み下さる物にも
「お奪いになられる物に対しても　神に感謝の日々を送ります。　325
「そして　今は　弁護士のスラストを連れてゆかれたことに対し
「善良で正しい神様に　感謝するだけです。」

　シンタックスは　その村を通過した。
そして＜**ドラゴン亭**＞に　遂にたどり着いた。
そこでは　かの羊飼いの少年が言っていたように　330
大いに仕事が繁盛している様子であった。
博士は　安楽椅子に腰を下ろして
望むものならばすべてがそこにあるのを発見した。

第九曲

　移ろい易き　生の旅路にそって
静かな満足或いは苦悩と呵責のなかで
朝も昼も　夜も昼間も
時間が　彼を導くがままに
何としばしば　人は　悩みに胸を塞がれては　5
一軒の旅籠に　憩いの場所を見つけることぞ。
世界を望見する意図があってのことか

彼は　深い思いを巡らして　道を突き進む。
或いは　空霊なる快楽に導かれるのか
または　愚かなる希望に惑わされてか　10
彼は　故郷に別れを告げ　未知の通路や
遠くの国を抜けて　さ迷い続ける。
そして　空想のままに放浪しても
必ずや　凡ゆる旅籠に　故郷を見つける。
仮に**運命の女神**（フォーチュン）が　愛の風の方向を変えたとしたら　15
昔の友が　今は　恩義を忘れているということになったとしても
旅籠が　彼の悩みを紛らして
そこで　二人は微笑みを交わすのではないだろうか。
冷たい風が吹き　嵐が顔をしかめようと
そして　雨が　怒ったような驟雨を注ぐとしても　20
雨に濡れた旅行者は　周りを見渡しては
どんな慰安所がそこにあるのか　発見するだろう。
そこで　彼は雨が強かろうと弱かろうと
旅籠のぬくもりを求めて　馬に拍車をかけるのだ。
その流離（さすら）う足を　そちらへ向ける人は誰も　25
優しさこの上なき微笑みに出会うことを　保証される。
そこへ趣いては　心底からの優しい意志なしには
そこを立ち去り難く思う人たち―
おお　彼らには　世間の騒がしき雑音を離れて
旅籠の慰安をこそ　求めさせよ。　30
かの田舎訛りの**シェンストン**[26]が　舌の上に
憂愁の音楽を乗せて歌ったように―

---

[26] William Shenston（1714-63）：イギリスの詩人。引用された詩は、詩人が “The White Swan Hotel” で歓待を受けた際の感動が元になったとされる、“Written at an Inn” という詩の中の、17-20 行にある。

“Whoe’er has travell’d life’s dull round,
“Where’er his changeful tour has been,
“Will sigh to think how oft he found
“His warmest welcome at an inn.”

「人生の愚鈍な旅路を巡った人は
「どこで　変化に富んだ旅を続けようと　その度に
「吐息をつきながら　旅籠（はたご）にこそ　35
「熱い歓迎の心があるのを　知るだろう。」

静かに落ち着いて　人々の喜びも
悲しみもしばし忘れて　シンタックスが
静かな夜を　心地よい夢と　軽やかな眠りで
過ごしたのは　さる旅籠でのことだった。　40
しかし　朝になると　雷が轟いて
雲が　奔流のごとき豪雨を　叩きつけた。
怒号する風も　激しく吹き付け
ガタガタと音たてて　窓が開け放たれた。
その騒ぎに怯えて　博士は頭を上げた。　45
そうして　素早くベッドから立ち上がると
震える部屋を歩き回って
こう叫んだ。「これは運命（ドゥーム）の日なのだろうか」と。
屋根のてっぺんでは　雨が打ち付け
村の大通りは　川のように見えた。　50
見ると　その大嵐に仰天して
村人たちが　窓から外を凝視しているではないか。
博士は言う。「私は物怖じする質の人間ではないのだが
「ここで　ぐずぐすしている時ではないな。
「居場所を変えるとしよう。燃えるような雷光を離れ　55
「台所の暖炉へと降りてゆこう。

「いやいや　荒々しき**自然**がその脅威を解き放っているあいだ
「トーストとビールでも飲み食いして　嵐を忘れよう。」
衣服も中途半端に　彼は急いで退室し
台所で　己れの座席を占めた。　60
一人の老婆が　主人に語っていた
この雷のせいで　彼女が何を失ったのかを。
青い稲妻が　自分の牝豚に襲いかかり
雌鶏一羽を殺し　あひる一羽を萎えさせたかを。
口を大きく開けて　別の男が入ってくる　65
干し草の山に火がついた
尖塔では　風見鶏に火がついた―
彼は　大きな声でそう宣言した。
それどころか　風の勢いが余りに強いので
風の歌が　鐘の轟きに勢いをつけているとも。　70
次には　雫を滴らせながら　仕立て屋が入ってきて
同じ文脈で　こう語った。
彼はこう断言する。「食卓に座っていると
風が吹き　雷が轟いた
そしたら　一種の火の玉がひょいとやって来て　75
私の店のなかを　跳ねたり駆け回ったりしたのだ
あちらこちらと　余りに素早く軽快に
それは　指ぬきを通して　私の指を焦がした
そして　人間が信じることが出来ればの話だが
私の針のすべての周囲を　それは駆け回ったのだ　80
そして　少なくとも 10 個ほどのボタンが
台所の扉から　追っ払われてしまったよ。」
かの寺男は　深刻な面持ちで
この光景に関する　自分の意見を述べた。
そして博士に近づきながら　85

彼の耳元で　静かにこう呟いた。
「悪魔自身が　その独房を破壊して
「かの弁護士スラストと一緒に　飛び出したのだ」と。

　さて　それなりの忍耐強さで
男たちが提示した話に耳を傾けたあと　90
シンタックスは　居間に姿を現し
朝食を　１人きりで済ますことにした。
彼は言う。「そうだ　私はここに滞在しよう。
「ドラゴン亭で　１日を過ごすのだ。
「誓ってもよいが　このドラゴン亭こそ　95
「私には妻があるということを　告示してくれる。
「そして　朝の最善の過ごし方は
「この妻に　手紙をしたためることであろう。」
彼は一休みし　書き始める前に溜息をついた。
そして　愛情溢れる書簡体詩（エピスル）が　流れ出した。　100

　　愛しきドルよ　長いこと　私は
　お前と家から遠く離れて暮らしている。
　我らは　しかし　離れているのが宿命とはいえ
　私の心の中には　常に　お前の姿がある
　朝と昨夜の儀式において　105
　私が　神への祈りを唱えるときは―
　そうして　神のご配慮を　懇願するときは―
　私は　我がドリーの為にも　唱えるのだよ。
　我が旅は　人様の生の道路と同じく
　これまでは　悪もあれば　善もあった。　110
　しかし　喜びのほうが　苦痛を凌ぐのであってみれば
　私には　不平を言う理由などないも同じだ。

希望を持たせる運命の女神を視界に入れて
私は　喜んで　煩わしきこの道を　歩いてゆこう。
私には　一冊の書物を書く希望がある　115
世間様は　きっと読んでくださるだろう。
そして　疑いもなく　その私の書物は
私の慰めにもなり　そしてお前の慰みにもなるのだ。
しかし　万一の失敗に備えて　一人の友人―
昔の学友から一人を発見した。**ディッキー・ベンド**なる人物だ。　120
彼ならば　親切で金持ちゆえに　もし　希望（ホープ）が道中で
私を欺いても　お金の都合はしてくれるだろう。
凡ゆる損失にも　私は屈せず
また　不幸があっても　その苦痛は取り除かれるという訳だ。
彼は　やがて来る多くの良きことの見込みとともに　125
私の家庭を喜ばせるという約束もしてくれた。
私がこれまで見てきた詳細については
また　何をして　どこにいたか　などなどは
帰宅するまでは　留保しておこうと思うのだ。
そして　帰宅したからには　音たてて薪が燃えるその前で　130
家庭的な栄光の光を身にまとい
煙草を吹かせながら　すべてを語ってあげよう。
しかし　分かっておくれ　私は危難からは自由の身だ
また　世間のしがらみに不慣れなわけでもないということを。
今後　私にいかなる災難が待ち受けていようとも　135
まずは＜第一のもの＞に配慮を向けたい。
お前は　家にいて　＜第二のもの＞への配慮を
するよう　気をつけておいて欲しい。
我が優しき隣人たちにも　どうか
遠くの友人からの挨拶を伝えておいてくれ。　140
10日以内に　多分1週間以内だろうが

私は　かの名高い**ヨーク**[27]の町を訪れる予定だ。
そこで　お前からの１行でもいい　優しい手紙が
愛するドリーよ　受け取れたらいいなと思っている。
そこで　もしお前の気が召すのならば　145
私の町の世間話でも　伝えてくれないか。
お前の愛しいハブ[28]が最後に見て以来
流されたもの　また流れている話なら何でもいいのだ。
そうして　私が伝えたい真理を　どうか知ってほしい。
それは　私の切実な心が生み出す感情なのだが　150
私が　今後どこを彷徨うことになろうとも
必ずや　私は「我が家」こそが故郷であると思うであろう
そして　愛の神と婚礼の誓に誠意を尽くして
私は　お前の愛すべき配偶者で居続けるだろう
それが　私が告げたい　心の真理なのだ。　155
＜いとも貴重なる我が妻（コンユクス・カリシマ）＞へ。では　さらばだ。」

このように　博士は　心の深い思いを表現した。
しかし　彼が封印をする間もなく
主人が　震えながら　突進してきた。
その顔は　まさに幽霊の顔に等しい蒼白さであった。　160
「ある人が　今　この町にやって来て
「かの城が　崩れ落ちたと報告するのです。
「そして　雷の激しい一撃で
「その城は　平らにひれ伏してしまったと。」
「どのお城のことかね？」博士は叫んだ。　165
「あの川べりのお城のことでございます。

---

[27] 原文：“York’s famous city”
[28] 原文は “Hub”。口語的表現で「夫、ハズ（husband）」のこと。

「有名なお城で　世間の噂では
「昔　さる偉大な王様が住んでおられたお城でございます。
「しかし　この美しいお城も　歳月を経るうちに
「哀れな　廃墟のような光景へと変身し　170
「今では　梟（ふくろう）と蝙蝠（こうもり）と　ムクドリの住処になっています。
「そして　悲しいことに　これも世間の噂ですが
「真夜中が支配する　暗黒の時間を狙っては　幽霊たちが
「武装して闊歩し　鎖を鳴らしているとのことでございます。」
「落ち着き給え」シンタックスは言う。「友よ　落ち着きなさい。　175
「そんな話は　捨て置きなさい。
「しかし　この新たな着想を　私は追求しなければなるまい。
「お城があって　しかも廃墟だとは！
「急いでそこへ行き　一目見てみよう。」

　嵐は過ぎ去り　180
太陽の様々な光線が　一日を蘇らせる。
グリズルが　扉の下へと運ばれては
この名高い場所へと　博士は赴く。
1個の岩の上に　この城は立っており
3方を　流れが取り囲んでいた。　185
そこでは　3つの川が合流し
亀裂の入った崖を　泡立つ波で　舐めていた。
苔に覆われた城壁を　博士は歩み
その後　城内の小室を闊歩しながら
深遠なる眼差しで　次のように叫ぶと　190
谺が　その音を　響き返した。
「しばらく　私に　ここをぶらつかせておくれ。
「この古風な堆積物は　思うに
「疑うべくもなく　サクソン的なスタイルだ。

「ここは　気高い　広大な大広間だけれど　195
「しかし　なぜ　礼拝堂はこんなにも小さく設計されたのか。
「我らの先祖は　祈祷の家というよりは
「祝祭の部屋こそを　大事に考えたと見える。
「この　誇りを持って　古(いにしえ)を生きた
「男爵たちは　過激で勇敢な人たちであったのが分かる。　200
「祈りよりも　豪奢なご馳走を愛し
「食べている間は　祈りにも行かなかったのだ。
「ここら中に　旗が吊るされ
「ここら中に　歓迎の吟遊詩が歌われたのだ。
「壁は　ギラギラ光る紋章で飾られ　205
「生気ある光景を　見せていた。
「かつては　門であったあの通路の下を
「ヘルメットを着けて　好戦的な気分で
「兵士の群れが進軍していった。また　彼らは強奪を約束する
「血腥(ちなまぐさ)い戦争　の労苦をも　恐れはしなかった。　210
「しかし　今は　悲しいことよ。
「画家の苦労に報いる程度のものしか　残っていない。
「封建時代の勝利の宮殿は
「今は　１枚の絵画以外の何の役にも立たないのだ。
「ここに　なる程　水はたっぷりとある　215
「しかし１本の木さえない光景とは　一体何なのか。
「向こうの塔には　壮麗さの面影は残っているが
「しかし　東屋を形成する藪は１つもない有様だ。
「しかしながら　私の芸術的腕前が果たすことが出来る限り
「この光景を　描いてみることにしよう。」　220

　積み上げられた石の山を　博士は発見する。
１つの座席を拵(こしら)えるために　ぞんざいな形で

土の上に置かれた山なのだが　ここに居れば
この場所の　太古の美を味わうことも出来るだろう。
しかし　彼の目が　構図を限る筈の　225
一線を確認しているあいだに
石の山は崩れ落ち　そして　語るも悲しや
彼は　土手から真っ逆さまに落下した。
一時代を賭けて集められていた　泥沼水が
尊敬すべき聖者を　受け止めた。　230

というのも　その時は　引き潮が
まさに　泥から退却しているときであったのだ。
しかし　もがきながら進むうちに
シンタックスは　よたよたと歩きでる工面をした。
これまで　いかなる不幸な男といえど　経験したことがないほどに　235
半ば気を失い　仰天し　そして水に全身を覆われて。

汚れと悪臭と　そして悲しみに圧倒されて
救いを齎(もたら)すべき家屋さえ　彼には見えなかった。
こうして　彼は　村の大騒ぎのなかを
旅籠目掛けて　馬を走らせた。　240
折りも折り　ある釣師が釣り針を投げ
直ちにそれが　博士の帽子を捉えた。
裸でそこに立っていた　水遊びの少年が
渦巻く流れに　大胆にも飛び込んで
鰻(うなぎ)のような泳ぎで突進し　245
やがて　博士の鬘(かつら)を掴まえた。
グリズルは　その不毛の荒野を辿ってはみたが
1本の草の葉さえも発見できず
自分の滞在を誘うものは何もないと考えて
ドラゴン亭へと　さっさと帰ってしまった。　250
旅籠の馬丁は「何か災難が降りかかったに違いない。
「主人も乗せずに　馬が1人で帰ってきたとは」―そう叫んだ。
しかし　主人もすぐに帰ってきた。男や女
少女や少年たちの　大騒ぎのただなかを。
博士は　大通りのあのガサツな侮蔑から逃れて　255
旅籠での休息に　大いに喜んだ。

　衣服を脱ぎ　身体をよく洗い　心は乱れ
頭痛に悩みながら　ベッドに就いたが
哀れ　シンタックスには　憩いを持つこともできず
横たわっては　受けた悲しみのすべてを数え上げていた。　260
親しげに宿主は　心配そうな配慮を示し
ミルク酒[29]を　急いで準備させた。

---

[29] 原文は “posset”:「ミルク酒（熱い牛乳にブドウ酒などを入れたもの：昔は風邪薬用）」

思い溢れる一飲みを　彼は優しく与える。
シンタックスは　微笑でもってそれを受け取る。
そうして　眠りの中で　受難からの猶予を求め　265
明日のより良き運命を　ただ　期待するのみであった。

第十曲

　哀れなる　死すべき人間よ　いかなる状況であれ
何たる大きな災難と病害が　待ち受けていることぞ。
その束の間の喜びも　悲しみに追い払われ
今日　祝福されたと思うや　明日は　悲惨な境遇。
彼が　最初にこの世に姿を現したとき　5
彼は　この世の光を泣き声と涙で　讃えるばかり。
次には　学童だ。彼は　教師の権力ある
命令を恐れ　鞭を怖がる。

それから　活発な若僧へと成長しては
情熱(バッション)が　彼を虜にして　我がものとする。　10
今は彼をこちらへと　次にはあちらへと連れてゆき
快楽(ジョイ)と**悩み**(ケヤ)の　交互の獲物となるのだ。
かたや　煌く財宝で　彼を誘惑し
他方で　快楽の溢れる器を　彼に与える。
その間　一方は彼の執念の追跡をかわして　15
他方は　彼の趣味にすっかり合わなくなる。
キューピッドの箙(えびら)から放たれる　尖った矢尻は
彼の熱い心臓を傷つけ　彼の肝臓を貫き通る。
他方で　美しき**ベリンダ**[30]の目に魅惑されて
彼は　呻き声を糧としては　溜息を啜(すす)るばかりだ。　20
仮に　この世の華やかで目眩(めまい)をさせる行路にて
彼が　両方から　安全に健全に　逃れるとしても
多分　他の全てが不発に終われば
彼は　それらを調和させることを考えつくだろう。
そして　人生のこの籤引(くじび)きにおいて　25
もしも　彼が　8人か10人の子供を連れた
口うるさいだけの妻を引き当てるとしたら
(そのようなことが　時々生じるから言うのだが)
哀れ　不幸なる男よ。彼は　注意の目を持たずには
どこを見回せば良いか　分からない。　30
野心が　空中を飛翔しては
目眩を起こさせる高みへと　彼を誘惑するかもしれぬ。
しかし　目的地に到着する前に
彼は躓(つまづ)き　決して二度と起き上がれない。
青ざめた**貪欲**も　彼の心を捉えるかもしれぬ　35

---

[30] 原文は “Belinda”: Pope の *The Rape of the Lock* のヒロインのことか。

ある人の幸福に終止符を打つ害毒というもの
それは　他人の悲しみには　一切関与しないし
また　微笑を与えることもない。
破廉恥な　やせ細った　そして人を苦しめる悪霊
全員の敵であり　同時に己れ自身にとっても敵―それが**貪欲**だ。　40
次には　毒を吹き放つ列をなして　**病気**がやってくる
苦痛の青ざめた家族なのだ。
最後には　**死神**が恐ろしい姿で現れ
彼を　**運命**の領土へと手招きをする。
美徳も　**運命**の車輪の悲しい回転を　45
しばしば　感じているのが見られるが
運命は　黄金の蓄えでもって
邪悪なる者どもを　その門で待っているのだ。
それでも　**美徳**は　依然として
正直なる行為の価値を知っており　冷酷な人たちのうえにも　50
その剥き出しの頭を憩わせている。
他方で　**悪徳**は柔らかい綿毛のベッドの上で
落ち着かずに横たわり　己れの苦悩を癒すために
阿片剤を　虚しく乞い求めている。

　親愛なるシンタックス博士に　健康な眠りを　55
与えなかったのは　悪徳のせいではなかった。
なぜならば　如何なる邪悪な思いも　邪悪な業(わざ)も
彼の清らな人生では　立ち入る隙(すき)がなかったからだ。
ある恐ろしい苦悩が　彼の眠りを打ち破り
太陽が昇る前に　彼は目を覚ました。　60
そして　大きな身震いが全身を通過したとき
これが　この世での最後の時かとも思ったものだ。
彼の四肢は　すべて　苦痛で支配され

熱い熱を出したかと思うと　悪寒に苛(さいな)まれ
舌はからからに渇き　唇は干からびてしまった。　65
自(おの)ずからなる溜息をつき
彼はベルを鳴らし　救いを求める。
それから大きく唸り声をあげたので　仰天したメイドが
家じゅうに　非常召集の声を　張り上げた。
すると直ちに宿主と女将(おかみ)が駆け寄っては　70
手早い処置を施して　最善を尽くし
彼らの客人の苦悩を　和らげた。
「医者はいますか?」シンタックスは訊ねる。
「いなければ　すぐに私は処刑されるでしょうよ。」
「そうです。非常に名高い医者なのですよ。　75
「お客さん　薬さえあれば　彼が直してくれますよ。
「すぐに彼を呼びにやらせましょう。この国中で
「その腕の良さで評判の　お医者様です。」

　宿主はすぐに医者を連れてくる。
彼の言葉は　重々しく　彼の目は　何かを考え込んでいる。　80

彼のベッド脇に　持ち場を取り
患者の燃える手を　触ってみる。
それから　学識ある顔つきで
この症例の諸兆候を　説明する。
「彼の全身は　熱病に浸されている。　85
「脈拍は　急激な動きで　脈打っている、
「だから　彼から　少しだけ血を抜けば
「彼は良くなると思われる。
「それから　他に　彼に役立つ幾つかの事項も
「私の頭の中にあり　それで彼の苦痛も癒されるだろう。　90
「一飛び　家に戻って　すぐに
「私の診断した果実を　持参して戻ってくるよ。
「そうすれば　ハッカとサルビア[31]で作られたお茶で
「彼の乾きも　癒されるだろう。」
ほどなく　彼は戻って来る。その技が披露される。　95
彼の血管からは　鮮血が流れ出す。
そして　彼の背後に人々が立っていたので
彼は　次のように　厳格な命令を下した。
「9時に　この**粉薬**を　彼に飲ませなさい。
「10時には　この**飲み薬**ですぞ。薬ビンをよく振って。　100
「それから　忘れてはダメですぞ。11時には
「この**丸薬**を3粒だけ　彼に与えなさい。
「この一連の仕事を　注意深くやりおおせたら
「12時には　今度はこの大きめの丸薬ですぞ。
「彼がぶらつくようであれば　急いで　105

---

[31]「ハッカとサルビア」原文は “balm or sage” である。”balm”「芳香性樹脂；香油、香膏＜カンラン科モツヤクジュ属の熱帯産の木からとれる；鎮痛用」。“sage”「セージ、サルビア＜しそ科アサギリ属の薬草＞」(いずれも『ジーニアス英和大辞典』)

「彼の背中に　この幅広の湿布薬を叩きつけなさい。
「そして　湿布薬が当てられたなら
「一時間以内に　浣腸を施しなさい。
「私は帰宅しなければなりませんが　3時か4時頃に
「もう少し多くの薬を携えて　戻ってきます。」　110

　今や　シンタックスと彼の熱病の様子が
議論の主題となった。
女将は　如何なる薬と言えど
役には立たないかもと　不安げに言った。
というのも　彼女は梟の悲鳴を聞き　115
更には　恐ろしい夢を見ていたからである。
昨夜　蝋燭(ろうそく)は　異常な青さで燃えていた。
そして　その火からは　一個の棺桶(かんおけ)が飛び出した。
そして　眠れずにベッドに横になっているとき
頭上で　＜チャタテムシ＞[32]の音を聞いていた。　120
メイドも馬丁も　その異様な騒音を　共に聞いたと
口を揃えて　宣言した。
「言うまでもなく」と寺男は言う。「これらは
「病人に対する　迅速な終末の宣言ですぞ。
「この酒を一杯あおり終えたら　125
「ひとっ走りして　司祭(ヴィカー)様を連れてきましょう。」

　司祭がやって来た　尊敬すべき人物
そして　良きサマリア人のように
急いで　旅人のベッドへと近づいた。
そこに　シンタックスは　今も　頭痛に苦しんで　横たわっていた。　130

---

[32]「チャタテムシ」、原文は “a death-watch” であり、これは “deathwatch beetle” のこと。

そして　大騒ぎもせず　動揺もせずに
彼は　敬愛する同胞へ
財布と宿と　そして　心ある人が　その場で与えることが出来る
すべての配慮を　彼に提示した。

　物憂い声で　シンタックスは言う。　135
「あなたは　私の魂を喜ばせて下さる。
「もし　私がこのまま　この館にいれば
「やがて　この身体は　土くれと化してしまうだろう。
「あの善良な医者も　私の胃袋のなかに
「彼の店のすべてを　投げ入れる積もりだ。　140
「親愛なるお方よ　私はものを食べることはできるが
「薬だけは　吐き気を催す＜ご馳走＞に過ぎない。
「あんな代物に耐えることが出来たとしても
「私は　癒されながら　殺されるのがオチだ。」
「おお」司祭は言う。「恐れることはありません。　145
「医療器具など　ここに置いてゆきましょう。
「さあ　いらっしゃい。ベッドを離れるのです　さあ　急いで。
「私のこの腕が　あなたを私の家まで　運ぶ筈です。
「家に着けば　私と愛妻が一緒になって
「あなたの＜心＞にもっと合う薬を　選んであげましょう。」　150

　シンタックスは　立ち上がったが　食料不足と
血の損失ゆえに　フラフラして立ちすくんだ。
しかし　それでも　彼は　優しい司祭と
その配慮に　敢えて甘んじることとなった。
そして　夕食には　炒めたプッディングと　155
炙られた鶏を　たっぷりと啄(つつ)いて食する事ができた。
そうして　正直者のグリズルはどうかと言えば

教会墓地の門を抜け　誰にも邪魔されずに
もう一度　教会墓地のご馳走を―つまり　緑溢れる宴席を
はしゃぎ回るという　幸運を手に入れたのだった。　160
司祭は　オックスフォード育ちで
頭の中は　学問がたっぷりと詰め込まれていた。
しかし　それよりも遥かに重要なことは
心の中は　善意がたっぷりと詰め込まれたいたということ。
また　魅惑的な奥方がいて　実に彼女こそ　165
彼の人生の誇りであり　また喜びの種だった。
愛すべき　親切な　友情溢れるお人柄で
容貌だけでなく　美徳にも恵まれたお方―
彼女は　湿布薬も飲み薬も　丸薬も用いずに
その患者の　凡ゆる病毒を取り払い　癒してくれた。　170
良き客人として　彼は　3日そこに滞在し
最高の代物を　食べては　また飲んだ。
そして　4日目となって　健康も快癒したからには
気になる旅を　彼は続けることになったのだった。

　それから　更に2日経ち　見ると　175
彼の目の前に　堂々たる**ヨーク**の塔が聳えるではないか。
「しかし　これは一体何だろうか?」彼は言う。
「向こうのあの人だかりと大騒ぎは？
「1万人もいるだろうか　向こうの平野に
「多くの人たちが　散らばって見える。」　180
「いや　それ以上だね」ある男が答える。
素早く博士のそばに歩み来て　言う。
「よろしければ　あなたの道案内人になって差し上げましょう。
「確実に　あなたはこの道を通らなければ
「本日の愉快な出し物を　見損なってしまうでしょう。　185

「競馬があるのです。この見世物のために
「多くの貴族や紳士方が　やって来ているのです。」
では　少し見学するとしようか　そうシンタックスは考えた。
私の書物に　主題が増えるという訳だ。
そのようにして　二人は突き進んで行く。この公道の友は　190
己れの役目を　次のように推奨する。
「私が　レース場まで　お供をしましょう
「そして　すべての馬の名前を教えて進じましょう。
「でも　最初に向こうへ行って　軽く一杯やってから
「どのように賭けをしたらいいのか　教えてあげましょう。　195
「どの馬が勝つのか　その馬の名前を言いましょう
「そして　それを知っている男たちを　取り込むのです。」

　彼がそう語っているうちに　レースが始まった。
騎手が鞭を打ち　馬が走る。

そして　その駿馬たちがゴールに着いたとき　200

男は　大声をあげて言った。「あなたの馬は　負けましたよ。
「幸運は　私に味方しましたね。今日は　私が勝利者です。
「今日　あなたは　20 ポンドお持ちでしょうな。」
シンタックスは狂いそうな顔つきになった。男は言った「くそったれ！
「あなたは　いいですか　20 ポンドを賭けたのですよ。　205
「さあ　今支払いなさい。さもないと　事態は悪くなるでしょう。
「私は　鞭打ってあなたをコースから　追っ払うことになります。」
博士は喚いた。そして　この一方的な宣言を
群衆に向かって　否認して見せた。
このように　殆ど予期することも出来ない状況に置かれて　210
彼の不幸なる運命は　どうなったのか　言うまでもなく
それが　推測の種になった。しかし　見よ。ある友を
運命の女神は　親切にも派遣してくれたではないか。
その企みに感づいていた　ある正直な郷士が
樫の木の杖で　十分な武装をして　現れ　215
その敵の肩に
幾多の厳しい打撃を与えながら
「この邪悪なる　この悪名極まりない詐欺師を
「私は　全霊を持って　打擲（ちょうちゃく）する。」
郷士は　そう叫んだ。「そして　きみたち　善良な人々よ　220
「私も　愉快な冗談が嫌いな人間ではないのだけれど
「今は　打擲で　少しだけ疲れているので
「きみたちは　この悪漢を　それなりの聴聞で処分して頂きたい。」
群衆は　このような使命に快感を覚え
震える詐欺師（ブラック・レッグ）[33]を　荒々しく捕まえた。　225
彼は　彼らの裁判へと身を委ねられたゆえ　まもなく
平原から　雫（しずく）を滴らせながら　走り去った。

---

[33] 原文は “Black-leg” とある。

　シンタックスは　己れの簡単な身の上話をした。
郷士は　勇敢だけでなく　親切でもあって
今や　完全な保護までをも　彼に申し出る。　230
そうして　酒と言葉両方で　博士を元気づけた
「私は　聖職者の方を　心から敬愛するものです。
「そして　常に牧師様を支持してもいます。
「博士様　私の父は法服を着ていました。
「彼より優れた人はいないほどの人物でした。　235
「しかし　年老いた叔父は　哀れな小者だったのですが
「その富を救うために　自分は飢えてしまい
「最後の遺書で　私に
「少なくとも　年に２千ポンドを授けてくれました。
「そうして　大学での私の苦労すべてを取り除き　240
「私は　書物に耽り　学識を求めることが出来
「こうして　何の悩みもなく　自由に過ごしている訳です。
「どこへ行こうとも　好きなことが出来るし
「スポーツを楽しみ　娯楽を嗜(たしな)み
「また　貴族たちの壮麗な財宝にも　何の嫉妬も感じなくてすむのです。　245
「更に　私は**ヨーク**に　一つの館を持っています。
「どうぞ　そちらへいらして　滞在なさってください。
「私の父のため　そして勿論あなたのためですが
「凡ゆるおもてなしをして差し上げましょう。
「というのも　博士様　聖職者様との友情を確認すること　250
「私は　それを厭うものでもありません。
「**善意**(ハーティ)[34]が　私の名前です。どうぞ　私からの
「歓迎の気持ちを　心にお受け止め下さい。
「そして　私には　快活で陽気な妻がいまして

[34]「善意」と訳した彼の名前の原文は ”Hearty” である。

「私が <Nay> というときは　決して <Yes> とは言いません。」　255
シンタックスは頷(うなず)いて言った。「神様からのお恵みですね
「男性が　所有して自慢できるものを持つことは。」

　遂に屋敷に到着すると　美しい夫人が
魅力ある雰囲気を漂わせ　二人を受け止めた。
「ああ　可愛いお前」郷士は言う。「私は　260
「帰宅するときは必ず　喜びをも持ち帰るんだ。
「ここに居られるお方は　尊師様だ。
「心からの歓迎の気持ちを　どうか　伝えておくれ。」
「はい」と彼女は答える。「はい　あなた。」
「全力で優しい気持ちを伝えること　忘れるでないよ。」
「はい　忘れません。」彼女は言う。「決して忘れません。」[35]
こうして幸せにもシンタックスは　**善意**(ハーティ)郷士と
その奥方の　食客になりおおせた。

第十一曲

　この悲しき　変化に富んだ人生において
悪と善が　日々争いを起こし
いずれが主人になろうかと　戦っているのが分かる。
あるときは幸運が微笑み　ほかの時には　それに代わって　悲痛な災害が
顰(しか)め顔(つら)をした力を誇り　人間に　光と影の交差した時間を与える。　5
この交差した時間に関して　シンタックスは　考え込んだ。
そして　己れの旅のことも考慮にいれて　よく反芻した。

---

[35] この３行は、“Yes” に対しては “Yes”、“No” に対しては “No” と答える奥方の従順さを例証している愉快な一節だが、日本語訳ではそれが生かせなかった。

しかし　それでも　彼は　全てが過ぎ去ったときに
最後には　安楽を見出すだろうと希望を抱いた。
こうして　予期せぬ親愛の情にあずかりながら　10
彼の静かな胸をよぎる恐怖など　微塵もなかった。
彼は　よく食べよく飲み　憩いに就く
そして　次の朝が　彼を歓迎したとき
郷士と奥方は　前日のままのお人であった。
大聖堂の時計が９時を打った丁度その時に　15
コーヒーとお茶と　鶏肉と肉塊が
整然と整えられて　姿を現した。
一日の朝食の始まり。
郷士は　そこで話を切り出して
以下　次のような会話が　あとに続いた。　20

郷士ハーティ

博士　信じていただけると考えますが
あなたが　かつては　私の父の席であった
その椅子に座っておられ　そのお姿を
私どもがこうして　眺める喜びが　いかなるものか。
どうぞ　この屋敷をご自分の屋敷とお考え下さい。　25
この先　例え３ヶ月になりましょうとも。
ここにいらっしゃれば　呑気にお過ごしになれ
読書もでき物書きも出来ます。お好みのままに。
このように　９時に朝食を取り
正餐は　ここで　いつも午後３時です。　30
６時になれば　妻がお茶を入れてくれるでしょう。

ハーティ夫人

そして　あなた様が　夜の長さにご退屈なされる時には

私めが　楽器を奏で　歌を歌いましょう。

郷士ハーティ

更に言えば　あなたはこの国を一周なされて
奇妙なものたちを　沢山ご覧になれるでしょう。　35
あなたのご知識があれば　更に
この名高い景勝の地で　探索する好機もございます―
見るに値する古代の建築物の幾つかを。
それも　あなたの書物を豊かにすることでしょう。
私は真実のブリトン人です　お分かりのように。　40
私は陽気さを愛し　また自由を愛します。
そして　生を受けている限り　己れの愛するものを
他の人とも　分かち合いたいと考えています。
今朝は　私は　軍事パレードを
見学に行く予定でいますが　45
今　ここに駐屯している竜騎兵の一隊は
壮大な観閲式に　姿を現すでしょう。
彼らは　名を馳せた大隊であって
さる高名な将軍様がやって来て　輝かしく整列した彼らすべてが
本日の過激な戦いを演じるのを　50
楽しみにされているとのこと。
このような余興をご覧になりたければ―
もし　好戦的な祝宴が　お気にいりますなら―
共有地へ　一緒に出かけてみませんか。
すべて　私が案内しますゆえに。　55
それでよろしければ　これから１時間以内に
扉の前に　馬を準備させましょう。

シンタックス

大事な友人のお招きだ
十分に　心づもりは出来ていますよ。
羽飾りのついた兜と輝くヘルメットとともに　60
月桂冠を被った英雄は　私の喜びです。
まだ少年だった頃　幼い年齢で
私は　**ホメロス**の高尚な書物のなかで
その昔　頑強なギリシア軍が　どのようにして
フリギア軍の浜辺を　大混乱に陥れたかを読んで　65
その太古の物語に喝采の声をあげ
栄光への熱烈な愛ゆえに　心のなかが燃えたものでした。
そしてトロイの平原を辿るときはいつも
私の心臓は　軍人的な喜びで　高い鼓動を打つのです。
なる程　私自身　戦争が止み　ヨーロッパが　70
戻り来る平和を歓迎することを祈りますが
それでも　イギリスの英雄たちが
敵に遭遇するとき　この胸が燃えるのを覚えます。
また　我らの武装した大隊が　敵を潰走(かいそう)せしめ
勝利の棕櫚(しゅろ)を　明け渡させるとき　75
また　我らの軍艦の怒号が
フランスの岸辺を脅かすときなども　そうなのです。
この壮大な観閲式は　私にとっても大きな喜びであり
あなたのお慶びに　ご相伴(しょうばん)するものであります。」

さて　一刻の猶予もなかったので　80
今や　シンタックスは　郵便車へと急いだ。
郵便車は　彼の大きな命に従って
1通の手紙を　彼に手渡した。
思い溢れた性急さで　彼は封を切ると

愛情篭った書簡詩が　こう語っていた。　85

　私の大事なあなた様。間違いもなく
あなたは　大事な妻をすっかり　忘れておいでだと思っていました。
私はと言えば　あなたへの親愛の気持ちは変わりなく
いつも　愛するお方　あなたのことばかり考えてきました。
想像しますに　今日までに　あなたは　90
お仕事を随分と進めておいでだと　そう思います。
つまり　愛しいあなた　お書きになるご書物を
私は　今か今かと　待っているのでございますが
見通しの明るいものだと思うわけです。思い切って申しますと
黄金による返礼が　たっぷりと望めるものであるということでございますが
その豊富な報酬は　あなたの学問の苦しみに
たっぷりとしたお返しになること　疑っておりませんし
長い歳月に渡る　あなたの心痛められたご苦労に
有り余る財宝でもって　償いをしてくれるはずでございます。
といいますのも　最愛のあなた　あなたが　100
何処へ行かれましょうとも　いつも　あなたは
こんなにも長い間　愛情と私とから離れている―
そのことに　深い溜息をつかれるのが　分かっているからです。
本当のことを申しますと　私の心臓は
あなたのお帰りを熱烈に焦がれて　燃えている次第です。　105
あなたがお帰りになれば　それに叶う敬意をもって
あなたをお迎えしましょう
つまり　仕立て屋が　目下　身につければ
とても映えるだろう衣装を　拵(こしら)えているところですし―
クレープの衣装ですが　繻子(しゅす)の胴着と一緒になって　110
私を　如何なる女神よりも美しくしてくれる筈です。
袖なし外套も　また　流行っているのですよ。

それで　一着注文をしたところです。
それから　リラ色の帽子も手に入れ
その上に　黄色の羽根をくっつけてみました。　115
こうすれば　私は誰よりも上品になることでしょうし
レーズン嬢を　心底　当惑させることになるでしょうね。
と言いますよりも　懐が自慢のあの雑貨屋の娘を
悩ませて　笑いではち切れることでしょうか。
そして　あなたもご覧いただけると思いますが　120
町で　私より美しい者は　だれもいなくなる筈です。
ああ　何という快楽と愉悦の心でもって
あなたの目に　私自身を差し出せばいいか！
大事なあなた　あなたが　お金をたっぷり満載して
お帰りになったとき　どのようにあなたを抱きしめましょうか。　125

シンタックスは　悲しい口調で　叫んだ。
「この女は　すっかりと　完全に　気が狂ってしまったようだ。
「彼女のこの態度は　必ずや　破滅へと連なるものだ。
「しかし　読み続けて　終りを見届けることにしよう。」

近況ということですけれど　ご存知のように　130
何事も　すべてがいつものように経過しています。
革製品業者のジョブソンさんは　夜逃げして
後に　支払いする一文のお金も残していないとのこと
また　ベト・バムキン嬢は　先週木曜日に嫁ぎました
そして　スティルボーンは　流産しました。　135
先日　目抜き通りでは　人の善いスキーミッシュ夫人が気を失い
これ　噂ですが　余りに病状がひどくて
ついに　死者として　運ばれていったそうです。
しかし　マザー・ゴシップは　近所中のあれやこれや　140

すべてに精通している人ですから
私に助言を下さいました。つまり　スキーミッシュ夫人は
敬虔な方で　お酒を飲んでおられるのだと思いますよと。
それから　ステイプルトン夫人を訪ねて
ある貴婦人が　町からここへとやって来ました　145
威勢のいい　また快活なお方ですが
何でも　ロンドンでは評判の美人だということです。
かと言って　自慢なされるほどの魅力は備えておられず
私の観察眼は鋭いので　見抜いた点ですが
彼女は　赤と白の塗り方の度合いが過ぎるのですよ。　150
彼女は　種々の馬車に乗っては　そこでなら
呪ったり毒舌を吐いたりできる　と　そんな噂をも聞きました。
でもこのようなこと　私にはどうでもいいことです　私には。
私は　中傷する質(たち)ではありませんので。
そういうわけで　今日はここでお別れです。　155
愛しいお方　あなたの永遠の恋人より。

追伸

もし　あなた様が　お金の入った袋を持たずに
お帰りになるのを　恐れておいででしたら
直ちに　湖へと　一飛びなされたほうが
遥かに良いことだと　思いますわ。　160
私の願いを挫(くじ)かれるくらいでしたら
いっそ　溺死なされたという噂を聞きたくございます。

上のような愛情の籠った詩行も
博士の心には　さほど慰みを与えはしなかった。
それゆえに　彼は　この可愛い手紙は　165
脇に置いていたほうが良いと思い

また　現時点での快楽を　その手紙の内容が
台無しにするようなことがあってはならないとも思った。

　さて　今や　郷士ハーティ氏が　道案内人となり
二人は相並んで　馬に乗り出かけて行った。　170
そうして　二人が１マイルか２マイル経過したとき
件(くだん)の観閲式の壮観さを眺めた。
華やかな衣装を身につけて　整列した一隊は
生気を与える光景を　展開していた。
美しく編成された騎兵隊が　周囲を旋回し　175
軍旗が揺れ　トランペットの音が響く
その時　長いこと戦争には慣れていたグリズルは
名誉ある傷もないわけではなく
かつて　敵に遭遇したときにそうであったように
昔の気力の全てが　また燃えて輝くのに気づいた。　180
耳をピンと立てるわけではない　彼女には耳はなかったゆえ
また尻尾を立てるわけでもない　彼女には尾はすでになく
それでも　鼻を鳴らし泡を吹き　身を投げ出した
あちらでは　身体を立てて　こちらでは跳び上がり
そして　このように可愛くふざけた後で　185
直ちに　全速力で大隊の中へと突進していった。
他方で　シンタックスは　恐怖には慣れていなかったが
己れの終末も近いのか　と訝(いぶか)しく思った。
それでも　彼の勇気は挫(くじ)けそうになっていたのだが
己れの鞍(くら)に　しっかりとしがみついていた。　190
その時に　グリズルは　丘の上のトランペット隊のところへと
急いで駆けてゆき　そこに静かに突っ立った。
そして　彼らと共に　戦争レースを終わらせ
誇り高く　自らの昔の場所を占領したのだった

というのも　グリズルは　前にも述べたように　195
昔は　トランペット吹きを運んで　戦場へと趣いていたのだから。

　さてさて　博士は　驚愕からは回復し
そこに留まりながら　その光景をじっと見ていた。
そうして　コルク栓のような軽やかな気持ちになり
友人と共に　ヨークへと馬を急がせた。　200
そこでは　再び和やかな夕餉が催され
凡ゆる慰安もまた　約束された。
時間は　取り留めないお喋りで費やされ
遂には　鐘の音が　一日の終りを告げたのだった。
楽しげにハーティ婦人は言う。「さあ　皆様　205
「この小さな仲間うちで　お互いが歌を歌って聞かせる―
「そのような提案にご賛成なされるでしょうか。
「変化に富んだ　楽しいものとなると信じますわ。
「そうして　トマスが夕べのご馳走を運んでくるまで
「過ぎ行く一瞬一瞬を　楽しく過ごしましょうよ。　210
「博士様も　きっと最善を尽くされて
「私の　このささやかなリクエストをお受け止めになると信じますわ。」
博士は　生まれつき重々しい人ではあったが
このような親友を手に入れたときはいつでも
一曲歌い出すような性質の持ち主だったので　215
今　人並み以上に陽気で　心地よい人物となっては
歌を歌い出す人となり　或いは謎々をかけたり
ヴァイオリンに合わせて角笛を演じたりすような人柄となっていた。
そして　今は　ひとしきり陽気になって
勧めに従う意志を　宣言した。　220
「では　私から始めましょう」郷士ハーティ氏が言った。
「私は　旅行するときは陸路を進むのですが

「ある歌を歌ったり　合唱をするときはいつでも
「私は陸を去り　海に向かうのですよ。」

郷士ハーティの歌

合図と共に　我ら　海に向かう　225
吠える嵐　轟く大波と　戦いながら
故郷の岸辺に　再び錨を降ろすこと
それさえ　知らずに。

打ち寄せる　大波を乗り越えて
遠くの海　また島を　訪ねるときに　230
やがて吹く大風が　我らを故郷の岸辺へと
運びゆくと　希望の女神の囁きあり。

戦争は力の限り　怒れども
敵の武器　復讐の鬼と化すれども
我ら　イギリスの船乗りは　235
故郷の岸辺を　讃え続ける。

万が一　海が墓場になるとても
一つの国が　我らの損失を悼むだろう
そして　涙が　故郷の岸辺を打ち付ける
大波小浪と　混ざり合う。　240

幾多の戦を勝ち抜いて
苦痛と危難も終わる時
義務を果たした喜びは
故郷の岸辺に　錨を降ろす。

ハーティ夫人の歌

キューピッドよ　さようなら　あなたの仕事はおわったの　245
　イダリアの　花咲く森に　ゆきなさい。
尖ったあなたの矢でさえも　今は痛みを与えませぬ。
　ヒュメン[36]様が　愛の傷を癒してくれましたから。

ヒュメン様はここにいて　全てが安らかなのです
　遥か遠くへ　あなたの羽根を　移しなさいな。　250
不安げな疑いにも恐れにも　悩みはしません
　ヒュメン様が　愛の痛みを　和らげてくれましたから。

キューピッドよ　さようなら　行為は果たされましたよ
　立ち去って　他の場所を　さ迷い遊ばせ。
ラルフとイザベルは　一体となり　255
ヒュメン様が　愛の住処(すみか)を守ってくださるから。

[36] 原文は “Hymen” であり、ギリシャ神話の婚姻の神。

博士は　ここで恭しくお辞儀をし
奥方の微笑む合図に　服従した。
「あなたの歌は　楽しいものでございました
「メロディーも　歌の主題もですが。　260
「しかしながら　最近はやりの歌の傾向は
「純粋で清らかなものから　遥かにかけ離れています。
「今の歌は　詩に対しても　常識に対しても
「わずかな主張さえしていない始末です。
「何か粗悪な奇想と　気取った調べ　265
「あちらこちらで　異様な言葉を使った
「ダ・カーポの繰り返し　それらの言葉は
「地上の如何なる言語においても　見出しえぬ言葉なのです。
「さらに　それらが　異様な言い回しのなかで浮き立たせられて
「現在流行の　歌の歌詞なるものを構成しているという訳です。　270
「私の学校の踊りの先生は
「しばしば　このようにして　道化師を演じては
「人を笑わせます（なぜか　誰も分かりませんが）
「でも　泣かせるよりは笑わせるほうが良いに決まっていますよね。
「あなたが　今からお聞きになる私の歌は　275
「今述べたような性質のものでしょう。
「これは　私の町では人気の高い彼のもとへ
「ロンドンから伝えられてきたものでした。」

シンタックス博士の歌

妻の叱責　我が定め―
人生の疫病にして　嵐なり。　280
おお　その妻が　炭鉱の穴蔵の底にいて
老いぼれて　万一　朽ち果てるなら

我が悩みも　終わろうものを
クローヴァーのなかに住めるものを。
ハルム　スカルム　ハルム　ホルム　スコルム[37]　285
李（すもも）入りのシチュウを　永遠に！
李（すもも）入りのシチュウを　永遠に！

同胞トムは　リンゴの木
あらん限りの　元気さ加減
片や　ドロシー　黄水仙茂る　290
木の下に　座す
多くのか細い藺草（いぐさ）のなかの
藪に茂るよ　黒イチゴ
ハルム　スカルム　あとは略。
我らみんなで　お城参り　295
隊列を組んだ　擲弾兵（てきだんへい）のよう
我ら　城壁を巡るとき　角笛
ラッパの　鬨（とき）の声
多くの貴婦人　寄り来たり
同じ気概を　抱きたり　300
ハルム　スカルム　あとは略。

吹きよせる突風受けんと　我が船は
帆をば　たっぷり広げては
波の上にて　踊りおり
遥か遠くの　谷間では　305

---

[37] 原文は “with harum scarum, horum scorum” となっており、“harum scarum” は、形容詞で「無鉄砲な、そそっかしい」、名詞で「無鉄砲な人」(『ジーニアス英和』) とある。いずれにしても、これが各スタンザのレフレインになっており、ここは、日本語の「あら、えっさっさあ」くらいに訳せばいいのかもしれない。

愛を無くした　恋の奴隷が
愛する人に　身の上話を語りけり
ハルム　スカルム　あとは略。

薔薇の上には　露ぞ懸りし
気まぐれに　西風は吹き　310
百合の花　頭をもたげて
ブルーベル　芳香を注ぐとき
我　岩間へと　走りゆき
子守唄をぞ　歌わんか
ハルム　スカルム　あとは略。　315

名も高きイリスムの流れよ
汝がそばで　幾たび夢見し　この我は。
いにしえの　聖者の書きし書物の中に
太古の知恵を　読みし我
いずれもが　生まれては死ぬ定め　320
汝も我も　また然り。
ハルム　スカルム　ホルム　スコルム
李（すもも）入りのシチュウを　永遠に！
李（すもも）入りのシチュウを　永遠に！

こうして　多くの愉快な歌を歌いあげ　325
その宴は　疲れた一日を　心地よく締めくくる。

（以下、次回に続く。）

The Tour of Doctor Syntax in Search of the Picturesque: Illustrated with Original Designs

William Combe

Nabu Public Domain Reprints:

You are holding a reproduction of an original work published before 1923 that is in the public domain in the United States of America, and possibly other countries. You may freely copy and distribute this work as no entity (individual or corporate) has a copyright on the body of the work. This book may contain prior copyright references, and library stamps (as most of these works were scanned from library copies). These have been scanned and retained as part of the historical artifact. (38)

This book may have occasional imperfections such as missing or blurred pages, poor pictures, errant marks, etc. that were either part of the original artifact, or were introduced by the scanning process. We believe this work is culturally important, and despite the imperfections, have elected to bring it back into print as part of our continuing commitment to the preservation of printed works worldwide. We appreciate your understanding of the imperfections in the preservation process, and hope you enjoy this valuable book.

---

[38] 上は原書からの写しであるが、版権の問題は所在しない旨の文言があるゆえに転載している。